

# 蛇の乙女の憧憬

八千草

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神であっても命を失う危険がある中南米神話世界において

私ほど危険からかけ離れた神はいません

神の肉を育てる女神 シロネン

飢えも戦いも儀式も生も死も何もありません

私がこの場所において誰よりも恵まれているのは知っています

どちらか一方に加担せず、どちらの糧にもなる神の肉

それが大切でも

それを理由に憧れをあきらめたくなかった

私は私を諦めたくなかった

私の憧れ

私の機構が軋むほどの焦げ（エラー）

私が一番最初に決めた叫び!!

神らしからぬ私欲憧憬!!

地から天を見上げて憧憬を口に叫ぶ

ああ!! ああ!!

私は!! テスカトリポカになりたかった!!!!

目次

第一曆	シパクトリ	1
第二曆	エエカトル	5
第三曆	カリ	12
第四曆	クエツパリン	20
第五曆	コアトル	34
第六曆	ミキストリ	49
第七曆	マサトル	62
第八曆	トチトリ	70
第九曆	アトル	83

## 第一曆 シパクトリ

青く青く雲ひとつさえない

時代は第一の太陽「ナウイ・オセロトル」

場は戦士たちの休息場 テスカトリポカの領域「ミクトランパ」

その領域の一角に戦士たちの糧となり血肉となる神の食糧 トウ

モロコシ

太陽の恵みをうけどこまでも広がるトウモロコシ畑

発明者たるテスカトリポカ of 概念を映し出したかのように色とりどりなトウモロコシがここにある

ここにあるトウモロコシは全て領域の主であるテスカトリポカの管理に置かれている

勝者も敗者にも戦士であるならば分け隔てなく公平に与えられる神の食糧

何かあつては一大事なのである一粒も取りこぼせない

その畑を管理しトウモロコシを育てるのが女神シロネンの役割

豊穰の女神としての仕事

大事な大事な大仕事です

そんな大事な大事なトウモロコシが一本 私の右手に握られています

そして目の前には顔を青くしながら頭を下げる名もなき乙女たち

乙女たちは私が管理を任されているこの場所において

身の回りの世話や仕事を手伝ってくれる名もなき神性存在達

簡潔に言う私の眷属に当たる者たち

その彼女たちが顔を青くしている理由が

私の右手に握られているトウモロコシが関連しているのです

ことは数分前新たな神の食糧を育てるために畑にトウモロコシの粒たねを植えている最中

一匹の黒い蛇が眷属の一人に牙をむいてきました

それに驚いた眷属がトウモロコシの粒たねを落とし、踏みつぶしてしまつた

そこまでは良かった　ただそこからが大問題  
踏みつぶしてしまったトウモロコシの粒たねを食べようとした  
不慮の事故とはいえ　神の肉を踏みつぶしたと罪の重さと恐怖か  
ら

一大事の隠蔽を凶ろうとしたと眷属は泣き叫んだ  
私も一緒に泣き叫びたい

と思考を現実逃避をするのはまだ早い  
事態を好転するのは遅すぎるが事態をどう収束するかは  
遅すぎるというわけではない

考えろ考えろ考えるんだいつだって考えることだけはしてきた  
戦いも暴力も手に取ったことのない私だけど  
いつだって考えることだけはやめなかった  
なんだって考えることは止められなかった  
今の状況を打破する何かを!!!思いつきたい!!

正直に言うのと隠ぺいを凶ろうとした時点で我々は滅亡の危機にあ  
る

王に不正を働こうとした

命を懸けて告白しても命をもって裁かれるだろう

思い浮かぶはテスカトリポカ神マ・ジ・レ・テ・ス・カ・ト・リ・ポ・カが黒の側面で怒り散らす姿  
そうならば我々は死ぬ

てかもう死んでるかもしれない

まずい　まずい　まずい　本当に終わる!!!

明日などなく終わってしまう

死など感じ入る間もなく終わってしまう

私が我らが終われば戦士たちの休息を邪魔することになる

そうならばテスカトリポカが本来すべきことである

戦士たちに与えられる公平さが行われない

誰にも味方せず誰にもいきわたるはずである神の食糧が分配され

ない

いけないいけない!!そんなことはあつてはいけない

戦いの神テスカトリポカの領域の一角を任されている神にあるまじき事態

まずいまずいなんとかしなければ考えなければ

考えても考えても最悪の事態しか思い浮かばない!!!

両手でトウモロコシを握りながら右から左へ左右に振る

突然の主のあんまりな奇行変動に

泣いていた眷属もうつむいていた眷属も慌てて私を止めようとする

止めないでくれ!辞めさせないでくれ!!神の食糧にも継りたい気持ちなんだ!

文字通り神頼みだ!!名案でろ名案でろ!!後がないので名案ください

自分で思考を止めると後で手に負えない事態になることはあるが今は本当に後がないんです!!

集中するほどに周りが見えなくなる私

そんなんだから気づかなかった

部屋に誰が入ってきたかは気づかなかった

足音も気配もよく知っていたのに

第一声が発するまで気づかなかった

「何をしているんだシロネン」

唇から発せられた音、音の一音一音の動作と重さ聞き間違えようのない声

意識を覚醒させるには十分に足りる音

即座に音の発する方に意識を視線を目を思考を口を向ける

何かきこうと何か言おうと

その御方の姿を確認した

指がよく通る黄金の長髪、しなやかさと一切の不合理性がない戦士の肉体

全てを見透かし、映し出さず煙に巻かれる鏡のような薄灰色の瞳高く、近く、どちらにもいない中立存在  
数多くの名を持つ我らの命をいかにかすもの

「いやまて本当に何をしているんだお前は」

籠があつたら今すぐに入りたい

このような奇行変動を見られるなど

このような失態など一番見られたくない相手

今一番遭いたくない神物

私が最も焦がれ、憧れる神物

領域の主 テスカトリポカ その神が私を見下ろしていた

## 第二層 エエカトル

「お前ほど役割を重く捉え、重要視する神物じんぶつはそうはいない」

テスカトリポカが身を屈めながら籠を揺らす

少女一人分なら入ってしまう大きな籠を揺らしながら独り言のよううに話していく

その籠の中にはいるは私シロネン どうも籠の中に入れました

そして私に対する評価感想があったのですね、考えてくれたのです  
ね

褒めていただき恐縮ですでも今日限りで私終わるかもしれません

「だからってな俺の前で籠に入りながら喋ろうとするのは度胸があり  
すぎるんだよ

落ち着いてその中からでて話をしようぜシロネン怒ったりしない  
からな」

本当ですか!!!怒ったりしませんか!!この前のように

爆発的にトウモロコシが増えれば良いなと考えた私が

爆裂するトウモロコシを作った時のように

―「何故トウモロコシを兵器に変えたんだ」―

―「誰でも簡単に作れるようになれば良いなと」―

―「つまりお前は神の食糧に不満がある」と―

―「主神よなぜ中指を内側に丸め親指で抑え私の額に向けているの  
ですか」―

―「お前の記憶を弾はじくためだシロネン」―

はじき出された中指は私の額にあたり目が覚めたのは三日後だっ  
た

目が覚めると爆裂するトウモロコシの製法の記憶どころか痛みも  
忘れていた

思い出そうとするたびひどい頭痛が頭が情報の記憶をしなくなる

「シロネンそろそろでないとその籠かごごと締め上げるぞ」



顔だけ出すのでお許しください  
額記憶粉砕と心の準備はできている了解です

大きな籠から顔だけを出し彼の方に向ける

「思考の準備はいつでもできています」

「そうかそれは懸命だなシロネン」

私が大事を起こしたとき彼の方はいつも来られる

そうでないときもあるが彼の方はいつも間見ているがいい

そんな筈はないのに納得してしまう力がある

でもまあ私を監視する理由なんてないから杞憂な筈

テスカトリポカは顎をさすって軽く口を開く

「大体お前が籠の中から俺と話すのは俺に怒られそうな事態をやらかしたときだけなんだよ」

「そう・・・でしたか？」

なんと！テスカトリポカ神は私の行動を見抜いていた

これがすべてを見通すものの力なのか!?テスカトリポカの顔を見上げて感心する

テスカトリポカはそんな感心を気にしてなく見抜く必要もないといわんばかりに淡々と

「最初からお前はそうなんだよシロネン、出会った時からそうなんだよ」

「出会った時からお前は籠の中がお気に入りだった、何かあると籠の中に隠れていたな」

私は嘘だと言いたくなかった。そのような動作を無意識のうちに繰り返していたのか

なんと考えていなくてもそのような動作を繰り返すなど恐ろしい

神として必要以外の動作を繰り返すなどやはり私は中南米の神性らしくない

「んでいい加減に何があった？俺の機嫌もそろそろ底をつくぞ」

彼の方は話をしても怒らないとおっしゃってくれた

ならば話を聞いただけなら聞いてくれるかもしれないと

私はようやく口を開いた

「実はトウモロコシの種を踏んづけてしまい、それを隠蔽しようとしたのです」

「……成程だからお前の眷属たちが慌てていたのかなんだそんなことか」

彼の方は大きな手のひらを私の頭に軽く何度か押し付けると

周りの景色が白く灰色に煙つてきた

目の前にいるテスカトリポカの姿も薄れていく

徐々に形が変わって大きな黒い蛇へと姿が晴れた

周囲の霧が薄れていくと余計に姿がはつきりとわかる

天井すれすれまで部屋が窮屈そうに見えるほどに大きな蛇が

私の額に口先をつける余計に視線が一辺に捉えられる

そしてゆつくりと口を開けた

「俺を謀るかシロネン」

重圧 響き たしかな恐怖 たしかな威圧 石造りの部屋にひびがはいる

空気を空間を揺るがすほどの怒気、空間が震える、空間が文字通りひび割れていく

たった一柱の存在でこれだけ空気が変わるものなのか

これがテスカトリポカということなのか？

「幼稚な誤魔化しで俺を欺けると考えたか？窮地を脅威で防げると？

全然なつちやいないぞシロネン、幼子が蒸留酒ブルケを飲み干すがごとの危うさだ」

大きな黒い蛇が籠から出た私の体を締め上げる

大きな黒い蛇が口を牙を見せて私を噛う

大きな黒い蛇となったテスカトリポカが私の頭を舌で小突く

長い舌が首に巻きつき少しずつ力が入っていく

しなやかな蛇の体でなくとも舌先で簡単に命を転がせると蛇の目が噛う

何もかも無力さを思い知った

悔しい！悔しい！！神格の差などわかりきっている

勝てないことが分かっているのにどうして悔しいなどと感じてしま  
まうのだろうか

無力さなど思い知ってしまったのだろうか

やれることもできることも最初から決まっているのに

どうして悔しいなどと己の無力さを恥じながら

考えることだけはやめられない

「だが俺にとってお前を殺すことは難しくはない」

「・・・殺さないのですか」

「なんだシロネン、俺の手にかげられると思ったか？この贅沢者が」

「では罰しないつもりですか貴方らしくもない」

「俺は今の時代の神だ、どう罰するかも舌のうちにある」

命を握られるとわかっていても見上げるのをやめない

最後の最後まで私は考え続ける

テスカトリポカ  
彼の方になる為に少しでも近づぐために

すると喜色満面の笑みを浮かべてテスカトリポカは笑った

これ以上ない名案を決めたかのように

「だから俺はお前をこうしよう!!!」

身体を締め上げていた大きな蛇の体が霧へと霧散していく

霧は徐々に人の姿をかたどっていき、一息もつかぬうちに

今度は大きなジャガーが目の前にいた ジャガーは私の体をしな

やかな尻尾で自らの背にのせた

ふわふわとした毛並みでなんて手触りがいいんだ・・・それにとて

もいい匂い

花のような、木のような、でも少し甘みと辛さがあるような・・・

すごい匂い  
不敬にもほどがある

あまりの心地よさに顔をうずめてしまった 吸ってるのばれてな

いよね

色々堪能したのばれてないよね!!!何とか言って!!

何の時間かわからない為に体を起こし降りようとする

すると尻尾で体を押さえつけるようにまたふわふわした背中に抑えられた

「目いっぱい力を込めて振り落とされるなよシロネン」

え何のことですか 考える間もなくジャガーが脚をけり出した

風 風を感じる 振り落とされないように必死にしがみつく

風が風圧が私を通り過ぎていく、今日をあければたちまち

力が入らなくなってしまうほどの風圧を体を感じる

顔を埋めていないと何もかもに振り落とされてしまう

テスカトリポカが何をしたいかは全くわからない

だがこの風に負けたくない、

顔を埋めているが徐々に力の入り方がつかめてくる、身体を一気にあげ

ジャガーの背中に腰を浮かせ、腹に足を乗せて背を丸める

前傾姿勢と両足で体重を支えてバランスを保てるようになった

身体を起こせたので自然と顔も真正面をむき景色を見渡せた

美しい景色があたりを通り過ぎていく

だけど私の頭の中にあつたのはただ一つ

テスカトリポカの背中に乗れた

そんな邪推を征するように尻尾でまた体を背中に埋められ

テスカトリポカは更に四足のスピードがあがる

さすがにもう顔は上げられなかったが

どこかテスカトリポカの機嫌がよくなったような気がした

背中は大きく暖かくテスカトリポカの呼吸音と

風がやみテスカトリポカがどこかに止まったのだと気づいた

「体は起こせるかシロネン」

「ご無礼ながら顔だけでしたらご希望にお答えできます」

「よしなら顔を上げてここがどこだか当てて見せろ」

戦神でも戦士でもない私はしがみつくので精一杯で身体を起こす力が入らなかつた

悔しくて仕方がない自分がここまで非力だと思い知らされたよう  
だ

そんな満身創痕の中でテスカトリポカからの問答、気まぐれにも程  
がある

実際彼の気まぐれに私と眷属の命はかかっているどこにも出たこ  
とがないので

どこかは必然的にわからないが兎に角考えようと背中から頭を動  
かし顔を上げて前を見る

見ただけでここがどこだか私はわかってしまった  
考える必要などないぐらいに動揺してしまった

頭を占めるのは疑問と不安と疑心だけそうたった一つ

―「どうしてこの場所に私を連れてきたのか」―  
そこにあつたのは石造りの大きな宮殿だった

まず石造りの宮殿があるこの場所は天上世界3階層、地下世界9階  
層含めて一つしかない

テスカトリポカがいるこの時点でこの場所はたった一つしか答え  
がない

あんまりな答えに疑問が頭を占め続ける  
私の動揺を意にも構わず、答えと返答をせかさされるように背中を尻

尾でたたかれる  
疲弊する体に鞭打ち、体を起こしながら回答と疑問を同時に口にす  
る

「テスカトリポカ神!!」どうして私を貴方の宮殿につれてきたのですか  
!？」

わからないまったくわからない  
ただ殺すだけならその場で殺しただろうに

私を自分の宮殿に連れ帰った意味が全くわからない  
テスカトリポカはジャガーの姿のままゆっくりと歩を進める

明確にどこかに足を進めているようだ 石造りの宮殿へと向かっ  
ている

「そういえば何も言っていなかったシロネン」

「はい何も言われてません」

嵐のごとく怒涛の風の中ここに来ましたからね

何もわかっていない私はだんだん疲れてきて元の体制に戻りそうになる

別に命尽きる前にこの記憶を焼き付けたい

尻尾も戻っていいと徐々に背中を押してくる、別に負けたわけではない

尻尾が催促してくるからだ。背中にまた体を預けたのを待ったかのように

テスカトリポカが雷鳴の如き一言を口にした

「シロネンお前を俺の妻にするために宮殿いに連えれてきたんだよ」

何言暴ってんのこの神性君

### 第三層 カリ

ジャガーに変身しているテスカトリポカの歩みは止まることなく

石造りの宮殿の中に悠然と足を進めている、足取りはとても軽く浮かれているようだ

そんなテスカトリポカと違い茫然自失となり顔を青ざめていくシロネン

先ほどまでの騎乗に成功した喜びが嘘かのように真逆だった

―落ちて怪我でもしてしまったほうが良かったのではないか―

そんな後悔が私の頭を支配している、どうしようどうしよう

どうすればテスカトリポカと結婚せずにすむのか

どうしたらテスカトリポカの傍にいずにすむのか

日常的に一緒に暮らすことになってしまえば、きつと私の異常など見抜かれる

そうすれば異常を直されるか、正されるか

絶対にそれだけはいやだ、折角捨てれずに諦めずにここまでこれたのに

神として正しくなくてもこれだけは捨てたくない

たとえ私を奪われても産まれ持った憧れエラは捨てたくない!!

だからこれは冗談かも知れないと思い、声を震わせながらテスカトリポカに尋ねる

「それはテスカトリポカ神の妻の侍女になれということでしょうか」

「俺の冗談だと期待したか?、言葉通りだシロネン」

テスカトリポカはさも愉快そうに喉を震わせる

笑われたその返答だけで冗談でないとわかってしまう

鼻が痛くなる、目頭が熱くなる。泣きたくなくて頬つねる

悔しい苦しい悔しい力があれば抵抗できるのに!!

違う力がないから考え続けて来たんだらう!!

考えろ考えろ!!ここでやめたら何もかもなくなるぞ!!

テスカトリポカになれなくなる!!挑めなくなってしまう  
この人に戦えなくなってしまう!!そんなの嫌だ!

この神のそばに居るといふことはこの人に挑むことができなくなってしまう!!!

嫌だ!!そんなの嫌だ!!本当に何もしなくて良くなってしまう  
最初から何も自分のものなんてないのに!!今以上に嫌になる  
何も無いけどやったと言いたいんだ!何か一つでも自分のものに  
したいんだ!!

こんなことであきらめるな!!背中の上で葛藤する私をよそに  
テスカトリポカはどこかの部屋にはいり身を屈め、私を揺するよう  
に下ろす

床に身体が叩き付けられた衝撃で自身の体の状況を痛感する  
どうやら床は石で出来ていて、部屋の中には藁が敷き詰められてい  
た

一瞬藁の上に黒い塊が見えた気がするがあれは毛玉か?  
そんな思考をよそ知らずテスカトリポカの体は  
煙を巻きながら人間の形へと姿を変えた

「ああ~~~~!!やっと体が解放された」

立ち上がり上半身を伸ばすテスカトリポカ  
身体の疲労から解放されたようで何よりです  
私は痛みから解放されせん。ええ全く

「なんだシロネン、もう起き上がれないのか」

緊張と恐怖と疲労感から指一本も動かせない  
確かに体の主導権はある筈なのに頭も腕も足も  
ひどい徒労感で動かせない、不甲斐ない私を察したのか  
テスカトリポカは私を抱き抱えると部屋の隅にある藁の上まで  
私の背中を壁につくように下ろした

「俺の妻は体力がないな」

農力と暴力は全く違う筋肉を使いますからね!!!  
視線だけでもテスカトリポカに抗議する  
テスカトリポカは黒い毛玉がいる藁の上へと手を伸ばし



いくつかの毛玉を腕に抱えてこちらに向かってきた  
もう何をされても負けたりはしないぞ!!!  
来るなら来い!!受けて立つ

「そうだろう?幼き戦士たち」

テスカトリポカの腕の中にいる黒い塊が動く

みいつみいつと高い声でテスカトリポカの声に反応している

かわいいぽっこりお腹に幼い顔つきのまん丸のお顔

まだ敵知らぬ柔らかな肉球と戦士たる資質が見える小さな爪そして牙

小さな耳によちよち歩きという表現が一番ふさわしい時期の赤子  
ジャガーの赤子たちが目の前にいた

ふああああああああくくくくつ!!!!

口から零れそうなほどの語彙が一切ない

愛らしさに対する感嘆を必死に口の中に留める

無理無理無理愛らしすぎるこれは卑怯!!邪悪すぎる!!!

疲労で体が動かせないから受け取り拒否もできない!!

知ってか知らずかテスカトリポカは幼き戦士たちを

私の膝の上や周りに下ろす、そして自身は私の横へと腰を下ろした  
そして耳元でこうささやいた

「シロネン」

私の名前を甘く一音ずつ愛おしさを持っていると勘違いしたくなる程に

甘く低く先ほどの威圧さを感じさせないほどに囁く戦神の甘言

「お前が俺と一緒にいるといえはいつでも触れるぞ?」

なんたる甘言!!!なんたる誘惑!!駄目だめダメ!!

目の前の楽園から目を閉じる!このような目に毒はだめだ!!勝てない!!

テスカトリポカ神?私の腕をつかんでどこに...っ!!?

駄目です!!やめてください!!赤子のぽっこりお腹に私の手を誘導

しないで!!

そのお腹の上で指を止められる、あともう少しで触れたのに「さあ?どうするシロネン、お前が一先でも触れれば了承したとみなすぞ」

実質脅迫にもほどがある!!ああでも力のない指が重力と意思に反して

ジャガーのぽつちりお腹に触れてしまう何もできない!!何もすることがない!!

!!  
こんなのはずるい!!何にもできないのにこんなことをするなんて

許さないぞ!!!テスカトリポカ!!!!!!

「あーあ〜」

みいつと高く幼い声が聞こえ、指先が柔らかさで包まれた触ったな?と念押しするように

テスカトリポカがひどく愉快そうに笑う声が聞こえた

涙はでることはなかったけれど今日確かに私は負けたと

自身に強く焼き付けた、この時間は私の中に焦げ付いたのだ

それからテスカトリポカとこれからの話をした

主に私がテスカトリポカの妻になることによって

今まで耕していたミクトランパの畑をどうするかである

この宮殿の場所はミクトランパとおなじ階層にあるが

ミクトランパからほど遠く、畑には遠すぎるので生じた問題だった「お前には行動力と実効性があるからな一人で北の畑に帰られても困る」

「お言葉ですかそうすれば北の畑は誰が見るのですか?」

「これからこの家の管理を任せるというのに余裕だなシロネン」

「えっ私がテスカトリポカ神の宮殿を管理するのですか!」

「そうだ俺の妻になったからには基本この宮殿から出る必要はないからな」

質疑応答の連続の繰り返しだったが最終的に役割自体はなくなる

ず  
むしろ私の役割が増えるという説明で

「テスカトリポカの妻」という役職が増えただけのように感じる

でも畑を離れては私の「豊穰」の権能の意味はなくなってしまう

「心配するなあ畑はここに移す」

「え?」

「そもそもトウモロコシを育てるのはミクトランパである必要はないから」

畑を移す?!ミクトランパである必要はない!!初耳ですが!!?

戦士たちにいきわたれば場所自体はどこでもよかつたんですか

最後の砦である仕事場遠距離問題も解決してしまった:

本当に打つ手が何もなくなってきた

でも「テスカトリポカの妻」という役割が増えるだけで

今までと何も変わりがなさそうな気がする

「それに新しい憩いの場も増設したかつたからな」

「本音はそちらですか?」

じとりと目を細めてテスカトリポカ神を睨む。

成程体よく結婚ということと土地を引き払い、新しい憩いの場を作りたかつたのか

やはり秩序と公平さを重きにおくテスカトリポカ神が私情で結婚するなどおかし<sup>エ</sup>い<sup>ラー</sup>のだ

私のような憧<sup>エ</sup>れ<sup>ラー</sup>など私情を挟まぬ御方なのだ、良かった安心したでも私情を挟まぬ判断など当たり前なのに

どうして私はテスカトリポカを睨んだのだろう

安心と安堵で一杯なはずなのに・・・その日は胸が熱くて仕方がなかつた

産まれた時のように熱くて熱くて仕方がなかつた

だが今までの話をまとめると

- ・テスカトリポカは宮殿と畑のより一層の管理をしたい
- ・だけど他にも仕事があるからそれをシロネンにさせたい

・日常的に仕事できる立場として「テスカトリポカの妻」にする  
この三点を行ってほしいのだろう

「言い忘れていたお前の眷属たちは俺が対処するからな」

「では私の眷属たちは!!」

「俺の妻の眷属たちだ無駄にはしない、勿論悪用もだ」

「・・・ありがとうございます」

「安心しておけ、お前の眷属たちは俺が処理しておく」

眷属たちにとっても私にとっても悪くない条件だと

疑問を特に考えず、何も考えれずにその答えを了承してしまった

そうこの時なぜか何も考えずに了承したとわかったのは

これよりずっと先のことである

この時はもう疲労と徒労と敗北感で情報が処理しきれなかった

「さあ俺の妻としての最初の仕事だ」

「何用でも」

「俺が迎えに来るまで幼き戦士たちに遊んでもらうといい」

だからテスカトリポカがいつも間にか入口にいたジャガーマンを

連れ添ってどこかに向かったのだと考えもしなかった、止めようと

もしなかった

テスカトリポカが何の用でジャガーマンを連れてどこかに行くな  
んて

戦神が戦士をつれて赴く先などわかっていた筈なのに

私は 止めることを考えられなかった

そんな思考を遮るようにジャガーが私の手を甘噛みした

ジャガーマンと宮殿の中を歩みを進める

ジャガーの赤子たちと戯れるシロネンを思い出し口角があがる  
やつとここまで連れ込めた、その歓喜とこれからのことで口元に手を当てずにはいられない

背後に歩くオセロメーの戦士、ジャガーマンがこれから起きる一計について体を唸らせている

「ひっさびさのテスカン公認狩りの時間ですにゃ〜！ひゃっほいっ  
!!!」

「今回は狩りではなく収穫だがな泣き言以外は全て回収してこい」

「眷属ちゃんたちの死体は？」

「シロネンの目にー俺の妻の目に二度と入らないように処理しろ」

「本気まじでいいのにかにゃ？一応テスカン自分の領土にいる眷属殺しちゃって」

「構わん、王に意見し王を欺こうとしたその罪は身を持って捧げてもらう」

「私は構わないけどね〜久々に狩りができるしこの子たちも体動かせるからね!!」

両手を広げたジャガーマンの周りは先ほどまでテスカトリポカが戯れていた赤子たちの親である

成獣のジャガーが数十体程集まっていた、総数でいえばまだいるがここにいる以外のジャガー達は宮殿の見回りやシロネンがいる部屋を護衛している

「ああだがこいつらのような精鋭の戦士の手を煩わせるのは少し頭が痛いかな」

「テスカン？私は？私は精鋭の戦士じゃないのにかにゃ？」

「お前はいう必要がないだろう」

「やだ〜っテスカンわかってる!!じゃあ張り切ってお仕事完遂してくるとしましょう!!」

きっとシロネンお前は大きな勘違いをしているだろう

王に嘘をついたものを俺が見逃すと思ったか

王に意見をしたもののは命をもって意見をしなければいけない

「安心しろシロネン、今日からお前の居場所はここだ」

「お前の家はここになる」

戦を何も知らぬ女神シロネンが戦を知ってはいけないという思いと

狩りを済ませたジャガーマンとジャガー達を労わる憩いのために  
シロネンの前では花と水血と戦の香りにおいて満消すためたすために

宮殿内の浴場の用意をしにテスカトリポカは鼻歌を歌いながら足を進めた

## 第四層 クエツパリン

名目上「テスカトリポカの嫁」になったことで

豊穰の女神の他にテスカトリポカの配偶神という

肩書役割が増えましたどうもシロネンです

ついこの前までミクトランパの領土内にある畑で暮らしていました

今はここテスカトリポカの宮殿内にある後宮で暮らしています

寝床が変わったのでなかなか寝付けません、目の下に隈があるよ  
寝床寝具が良いにおいするとかじゃやないですな？よ

ちなみにテスカトリポカは宮殿で寝ています。寝床は別々なんです

後宮の入口と出口は同じで扉は外からしか開けられません

扉の鍵は宮殿の主であり後宮の主でもあるテスカトリポカが持っているので

テスカトリポカが開けない限り後宮の扉は閉ざされたまま

それでは他の部屋にはいけないじゃないかと？それが行けるんです

後宮からは私が任された役割をする為の部屋にだけ行けます  
幼赤き戦士子たちの保育部屋

この部屋ではテスカトリポカの宮殿にいるジャガー達が

宮殿護衛をしている間子供たちを一か所に集めて保育する場所です

私が来る前はジャガーマンが突きつきりで保育をしていたようで

子供たちが多いので人手があると助かるとジャガーマンは

赤子ジャガー達に襲われながら

子供子たちジャをガの爪が食い込んで痛いかわいがつています

私はこの部屋をジャガー保育所と呼ぶことにした

次に蛇と書かれた部屋に入る、ここは赤子の蛇達部屋

蛇といえども姿が蛇に似ているだけで厳密には蛇ではない

ジャガー達も姿がジャガーなだけでジャガーではない  
蛇やジャガーの姿をした霊獣で動物ではない!!

彼らもまたテスカトリポカに認められた戦士たち

ジャガー達はまだ一見動物と見分けが付きませんが  
蛇達は見分けがつく一目でわかります

この子たちは爬虫類の蛇よりも体長が規格外なのだ

一番小さい子で部屋の半分 一番大きな子で部屋のすみすみまで  
蟠局を巻けてしまう

軽く巻きつかれるだけでも、私の体を余裕をもって覆いつくしてしま  
まう

この部屋にいる蛇の数は七匹。七匹の蛇の保育をするのだが

基本七匹の蛇達は消費する力が増大なのか

テスカトリポカに呼ばれる以外は寝ている

だから今日も七匹いることを確認して部屋を出る

最後にテスカトリポカの宮殿に移された、旧ミクトランパの畑に向  
かう

ここでの仕事はミクトランパにいた時と変わらない

種をまき、育て、収穫するこの三点を行う

この宮殿には眷属達を連れてこれなかったのだ

種まきと農作業は一人ですることになったが収穫になると

成獣のジャガー達が実を潰さぬように一つずつ丁寧に

トウモロコシを収穫し保管庫に運んでくれる

赤子ジャガー達も大きくなると訓練のため

作業に参加させるとテスカトリポカが言っていました

この三つの作業を終えると料理作りに入ります

料理も食事も床で座りながら行うんですよ

ちなみに食事前の部屋には大きい敷物が敷かれていてこの上で食  
事をします

調理器具は石器か土器を用い、皿型の石器で穀物を磨り潰す

食糧類は豊富にあり、色々な料理も豪勢な料理も作れますが

テスカトリポカは戦闘後や宴以外での複数の料理が好きではない



とわかったからです

「複数の面をもつので複数の料理がいいのではないかい  
そう考えてはいても私が作れる料理は限られていて  
考えを実行できる腕がないのを悔しく思いながら

トルテイヤと肉を詰めたタマル、瑞々しい果物を用意しました  
料理数が少ない事を果物の数で合せるという愚策を考えたことよ  
りも

果物を食べる機会があまりなく、自分で食べたいが為に  
果物を一緒に出してしまったことが

私は恥ずかしくてまともにテスカトリポカの顔を見れず俯くしか  
なかった

テスカトリポカに初めて作った料理がこれなのかと  
耳を赤くしながら料理を差し出した、惨めで泣きたかった  
でも

「……俺の分も作ってくれたのか」

この時一瞬作ってはいけなかったと聞こうとしたが  
緊張と恥ずかしさでテスカトリポカを見つめるしかなかった  
テスカトリポカは私の視線に合わせるように体を屈むと

「いや食事の量や俺の分の有無まで伝えていなかったから  
作ってくれると思っていなかっただけだ」

私の作った料理が乗った配膳皿をテスカトリポカが受けとる為  
両手を前に差し出し配膳皿を掴みます、私は離そうとしません  
するとテスカトリポカは意地の悪い笑みを浮かべ

「俺の捧げものを取り上げる気かシロネン、妻といえどそれは許さん」  
一瞬で私から木の配膳皿を奪い食事する席に座り配膳皿を床に下  
ろす

配膳皿をじいつと凝視し、料理を一つ一つ観察しながらテスカトリ  
ポカは料理を口に運んだ

さすがに口に運んだ料理を取り上げるわけにはいかず  
私も自分の食事をしたが緊張のあまり、料理は味がしなかった  
食べたかった果物の味も何一つわからなかった

テスカトリポカも私も食事中何も話はしなかった

私はもう会話できる状態にはいなかったし

食事をするテスカトリポカを見ないのに必死だった

初めての食事はとてもとても長く感じた

早く食べ終わってこの場を離れたいのに

いくら食べても料理が減らなくてももう泣きたくなかった

これはテスカトリポカが料理を平らげるまで続いた・・・

これを気に朝食、昼食、夕食は私が作ることになり今日も作っている次第です

お酒は食事と一緒にいただくとはないので出せません

私も飲みませんし何よりテスカトリポカがあまりお酒を飲まないからです

宴の時しか飲まないのと決めているようで

それよりもカカワトルを飲む量と喫煙量が多く

朝食にカカワトルを用意すれば、昼食用の分まで飲み干し

毎食後のタバコは絶対に欠かさず、食後でなくとも吸うのを見たことがありません

そして食後のテスカトリポカは毎食後私にこう言います

「もうこの料理が食べれば満足だ、食後の煙草付きでな」

それって美味しいご飯と美味しいカカワトルと美味しい煙草のこの三点を

用意してくれれば誰でも良いってことですかね!?この邪な神め!!

そう考えながらも私を抱きしめるこの腕が嫌ではないことにはわかっていた

何故嫌でないのかはまだわからなかった

ここで神の結婚についての説明です（中南米神話世界での）

神の結婚は一人の男神に対し一人の女神が基本です

それは第一の太陽にいきる生命に定める秩序である以上神々にも適用されていました

しかしここにたった一柱の例外が存在します

王権の象徴であるテスカトリポカだけが複数の妻を配偶すること  
つまり一人の神に対して複数の配偶神、一夫多妻を許されています

テスカトリポカは私だけでなく他の女神も妻に迎え入れることが出来るんです

なぜ今の今まで一人も配偶神を娶らなかったのに

今になって妻を嫁を配偶神を迎え入れようとしたのか全くわからない

実はテスカトリポカの宮殿にある後宮には私の部屋の他にあと三柱分の空き部屋がある

ただの空き部屋だと考えれば済むが、部屋の広さが私の部屋とまったく同じで

空き部屋にしておくにしては部屋に使われた材質も全く同じで

この四部屋以外は全て異なる材質で作られており、薄気味悪さを覚えて

私を含めれば後宮内にある妻の私室の仮定神柱は四神柱

つまりこの後宮にはあと三神柱迎え入れることができる

杞憂であればと考えながら今日の夕食の準備を進めた

あと夕食で使おうと考えた黒曜石の石包丁を研いでおこう

そんな杞憂を考えながら料理を進め、テスカトリポカの帰りを待った

そして事件は起こった

「シロネン今日から後宮に入る新しい妻のアトラトナンだ」

「ひっ・・・ひう」

「アトラナンは大地と水の女神だ」

テスカトリポカが炎と未来の神の姿で全身血塗れのまま

顔を両手で覆って泣いている女神を抱いて帰ってきました

見たもの衝動のままにテスカトリポカを刺しそうになった

しかしテスカトリポカが何の考えも無しに事案を起こす筈がない

一瞬の考えにしがみ付き、我が神性の秩序を全稼働し衝動を抑える  
どう考えたって泣いているテスカトリポカが悪いようにしか見え  
ない

このどうしようもない先入観は一度隅に置き

落ち着こうと短い考えをまとめた結果

私は大激怒した

少し前に私を妻へと迎え入れた癖に新しい妻とはどういうことだ  
!!? 期間開ける!!

お酒飲んでるな!?どこで飲んできた!?戦闘はいいけれど血は落と  
して来い全能神!!

などとそういう問題ではない!!この蛇神!!!

よりによつて!よりによつて!!!

料理二人分作り終えた後にもう一人連れて来やがった!!!

調理器具も!!料理の配膳も!!今日は暖かいまま肉料理を食べれる

ように!!!

肉を石焼きで直に食べれるよう石に肉が焦げ付かないよう研究ま  
でしたの!!!

この野郎!何の連絡もよこさないで帰って来やがった!!

何のために全能神やつてんだよ!連絡出来なきや何のために

混沌戦士ジャガン  
何時でも何処でも混沌代表がいるんだよ!!

ちくしょう!!私の考えが的外れにも程がある!!悔しい!!

ふと私の手の中にある焼いた肉を切り分ける為に

鋭く研いだ黒曜石の石包丁を思い出す

そしてまだ泣く女神を離さないテスカトリポカを見る、全然悪びて  
ない

ぼろぼろと涙を流す女神と目が合い、微かに動いた口が四文字を出  
した

「た」

「す」

「け」

「て」

私は迷わず全女神の敵テスカトリポカを研いだ包丁で刺した

これが後にテスカトリポカと後に4人になる妻と何度も繰り返される

覚悟しやがれテスカトリポカ全能神VS4女神刃傷沙汰の始まりの鐘ゴングだった

我ら妻達との戦いの鐘を鳴らしたのは貴方だからな!!! テスカトリポカ!!!

結果としてテスカトリポカが逸早く私の手を叩き落とし

石包丁は砕け散り、第一回の刀傷沙汰は幕を閉じた

そのまま食事が用意された敷物の場所にアトラナンを下ろし

テスカトリポカは胡坐で座ることで空いた空間、足の間

私を座らせた、突然の生足の間座らされた

突然だがテスカトリポカの装いは黒い羽根を模した頭飾りに

肘から手までを覆うグローブ、膝から足の甲まであるサンダル

服装は上半身裸の下半身は腰布だけである　そう布面積が少ない

私は踝丈まである貫頭衣かんとういに帯状の紐飾りを腰に巻いていて

左右に丸いピアスをつけているよ　足にはサンダルを履いている

そんなテスカトリポカの胡坐の中心に私は座らされた

必然的に私の後頭部はテスカトリポカの胸に

自然的に両手は足に置くことになる

どこで誰のなにに手を置いてるか考えた私は

逃げ出そうとしたがテスカトリポカが腰に手を回していて動けな

いアトラナンは一連の出来事に追いつけず目を丸くして座っている

いや混乱しているだけか・・・なんだ視界で大きな手が左右に振られてるな

手の主であるテスカトリポカに視線を戻すと、口を軽く開けていた

「手が痛いから食べさせくれ」

「自分で食べるよ」

えっ? 石包丁を叩き落した所為で手が痛くて何も持てない?

私の腰に巻いている腕を外して食べればいいじゃないですか  
今日は疲れたから無理？痛くてこれ以上動かせない？

・・・じゃあ仕方ないか今日だけですよ全く!!

二人の会話コソトアトラナンは後にこう語る

「シロネン絶対騙されてる!!!」ーと。

テスカトリポカの我儘に気づいたアトラナンは

我儘な主の蛇絶のよう対な獰猛言な瞳うなによき

黙って食事はをするしかなかった

物騒な会話が頭上で起きていると知らない私は

新しい石包丁で果物を三人分に剥いていた

料理は増やせないが果物は沢山あるので

これで人数分増やそうと必死であった

おい今貴方果実水飲むのに片手使いましたよな

黎明の霧？便利ですな属性、じゃあ許します

今後の私が許すかどうかは知りませんがね!!!

剥きたての果物を一つテスカトリポカの口に突っ込んだり

アトラナンも食べさせることになったりと

我儘全能神の気まぐれに振り回されつつ予測不可能な食卓は終了  
した

食卓を終えたのでテスカトリポカに抱えながら後宮へと戻り

アトラナンに自室になる部屋や後宮から繋がっている宮殿の部屋

を説明した

宮殿の部屋は後日一緒に案内するが、情報だけでも損はない

当然急なことでアトラナンの部屋は何も用意が出来ていないので

今日のところは私の部屋で寝ることになった

そして今私は初めてアトラナンと会話を試みた

何かお互いに理解できる話のほうがいい、彼女も話しやすいだろう

となるかつい先ほどまで体験していたことのほうがいいな

意を決しアトラナンの方を振りむきこう尋ねる

「テスカトリポカって良い匂いするよね」

「へっ?」

よし何を言っているんだ私は、何を間違っているんだ私は!!  
テスカトリポカの悪評を口には出したくないからと  
とりあえずテスカトリポカの近くにいた訳だから

あの良い匂い反芻して堪能してないって、何を聞いてるんだ  
あんまりな質問と状況に冷える空気、微動だにしない両者  
でもアトラナンは小さな声で

「しましたね」

「だよね!!良い匂いしましたよね!!」

「はい!!なんかとてもすっごく良い匂いがありました!!」

「そうなんですよ!!テスカトリポカに出会ってことは

神としての階段を一步登ったって感じがするんです!!」

「女神が神としての階段を一步登る???. . .わかるかもしれない」

「なんならテスカトリポカがテスカトリポカの香りがして混乱する」

「理性はなく、思考はなく、ツッコミもなく、ただ本能の赴くまま

「テスカトリポカの良い匂い」について私達は会話を弾ませた

テスカトリポカが戦場についてもわかるのはその香りのせいとか

暴君!冷酷!冷淡!でもかっこいいと称賛も口にした気もする

ひとしきり語り笑った後、アトラナンの服も体も血塗れだったことを思い出し

宮殿にある風呂場まで案内して、彼女は風呂に入った

私は彼女の着替えの服を用意するために

風呂場から出て、服や装飾品が置いてある保管庫に向かった

夜の宮殿を歩くのは初めてで暗いが月の明かりや

通路にある松明のおかげ暗くはない、太陽の光がなく

まるで別の宮殿に訪れたみたいで好奇心高らかに保管庫へと歩く

急ぎではないのでゆっくりと歩きながら

話の中で出てきたケツアルコアトルという名前について考える

ケツアルコアトル神

水や農耕に関わるテスカトリポカ神と同じ蛇神

創造神の石柱にして兄弟、最高存在

でもあまり兄弟であることは神々達の間でよく知られているが  
両者とも公言しておらず、あまり口には出さない方が良いらしい  
殺しあうほどの関係で険悪すぎず良過ぎでもない  
神々の関係においても煙たいものがあるとは  
肩書の通り過ぎないかテスカトリポカという神は  
でもケツアルコアトル・・明日は我が身の世界において平和主義  
の神

平和主義の最高存在、生贄の儀式を嫌う“異例”  
親近感を感じてしまう“異例”の神か

いつか会ってみたいな、会って話して可能なら聞いてみたい  
私の中にある確かな憧憬は神に不要なものなのか  
既存の秩序を嫌う彼に聞いてみたい

テスカトリポカ神と兄弟・・似たような匂いするのか  
そんなふわふわとした考えをしながら保管庫についた

保管庫は複数あるがこの保管庫には主に布、服、靴、織物、  
装飾品、針、裁断用の黒曜石が保管されている

その中からアトラナンが着れそうな服を探すのは大変だが  
取りあえず着れそうな服を何枚か選んで

布と裁縫道具も後宮に用いれるようにしよう  
なにはともあれ服を――――。

とくに何も思ったわけではないが  
勘と言うのか感と呼ぶのか

保管されたものと違い乱雑に置かれた袋があつた

袋の中には血の付いた見覚えのある服が何枚も入っていた  
服を一枚取り出し、床に広げてよく見る。

この服の形状も少し血がついて変色しているが色も  
つい最近まで私が日常的に見ていた服だ

これは――――。

この服は――――。



考えろ考えろ考えろ

かん g 「何をしている？」

「わぎゃっ!!」

声のする方に振り向けば

保管庫の入口に腰に布を巻いたテスカトリポカがいた

戦士の姿から随分と気軽な姿になりましたね

いつから保管庫の入口にいた？

「なぜ貴方が保管庫に？」

「それはこつちの言い分だ、お前が宮殿内を歩いてると

見回りのジャガーから報告を受けてな」

「私は風呂場にいるアトラナンの着替えを取りに来たんです」

「着替え？それだけか」

「貴方がアトラナンの着替えも用意しなかったからですよ！」

選んだ服と布、裁縫道具を持ち、テスカトリポカの方に見せる

するとテスカトリポカは保管庫の中に入って

床に広げてある服を拾う

「この服が気になるか？」

「・・・それが入っていた袋に血がついていたので少し」

「わぎゃわぎゃ一枚だけ出して床に広げるのが少しねえ・・・」

夜だからなのか体が嫌に冷えていく、ただの会話なのに

確認と尋問を受けているみたいだ

「いや悪いのは俺か、先にアトラナンの着替えを用意すれば良かった

んだからな」

「そうですよ」

「そうだよな、これは何か詫びと返礼が必要だな」

口が噛えない、目を閉じて苦笑いするしかない

なんで用意すれば良かったんですか？

そうすれば私は何を見なかったの？

ねえテスカトリポカ、そのお詫びは何に対して？

あの袋は・・・あの袋の本身は

「よし決めた明日は仕事を休むぞ」

「えっ？じゃあ明日は一日宮殿に？」

「そうだ明日はお前も休み休息をとれ、後明日は商人を招くぞ」  
「商人ですか？」

「商売の神が品物を売りにでも来るんだろうか  
名前はマクイルシヨチトルとシヨチピリ

たとえ仕事は休みでも何が足りて何がないかわかるように  
各帳簿を用意しておこう

「お前も気になるものがあれば言えよシロネン  
遠慮するな何でもいいぞ、それこそ果物でもな」

「でもお金ないです」

「ああ？お前は俺の配偶神だ、そうである以上

俺がお前に買えずして誰が買うんだよ」

テスカトリポカはムツとした顔で私に言った

アトラナンにも同じように伝えるように言われ

「さあ夜も更けてきた、明日は俺が家にいるから

食事も俺が用意しようではなシロネン」

そういつて保管庫から締め出された

そして私の姿が見えなくなるまで

テスカトリポカは私を見続けた

どんな顔をしているのかは怖くて見れなかった

風呂場につき、アトラナンに服を用意できたと声をかける

彼女は髪にこびりついた血が錆びてとれないので

服を置いて先に戻って休んでほしいと言ってくれた

けれど帰りに迷子になるといけないので

風呂から上がるまで一緒にいるとアトラナンに伝えた

アトラナンには感謝の言葉を伝えられたが

私の本心は違った

今は一人でいるのが怖かった

誰でもいいから誰でも一緒にいてほしかった

お風呂場は脱衣所も比較的暖かい

石材が地熱を心地よく和らげているので寒くない

寒くないはずなのに私は震えていた

寒くて寒くて仕方がなかった

私はなにか得体の知れない一面を

テスカトリポカの一面を見てしまった

床に座りながら強く握りしめたままの手平をあける

そこには一枚の布の切れ端があった

血のついてない布の切れ端

先ほど取り出した服の切れ端

切れ端にはトウモロコシの刺繍があった

刺繍は私が眷属達の服の裏に縫い付けたものだった

袋の中にあつた服は私が眷属達に仕立てた服

他の誰も来ている筈がない流通するはずがない服が

どうして元の色がわからなくなるほどの血がついて

どうしてこの宮殿にあるのかわかりたくなかった

全部数えれていなかったけれどあの枚数は

私の眷属達の人数分と合致する

あの血の量からはもう生きていないことがわかる

目が熱くなる 鼻があつくなる 頭がいたくなる

口が熱くなる 目の前が 胸が熱くなる

私は声以外の何もかもをそのままにした

そのままに流し続けた 声も出しきってしまったかった

でも懂れて焦がれる続ける身は何も出やしなかった

何もかも出し尽くしたいのに私は渴いて

最初から何もない、渴いた私からは何も出やしなかった

アトラナンのように目から涙も出なかった

何もない私は涙を流すことすら同じにしてくれなかった

結局アトラナンが出てくるまで私はうつ伏せに寝転がって顔を伏せていた

アトラナンには驚かれてどうしたのと心配されたが

「お化けが見えたから顔が上げられない」と無茶を通した

すると私がお化けが怖くて帰れないと信じてくれたアトラナンは

私の手を引いて後宮まで帰って、私の部屋に一つしかない寝具に一緒に寝た

「私かなれない場所で寝付けないから一緒に寝てくれると嬉しい」「きつと私は怖くて泣いてしまうから」

彼女の包み込むような優しさは「大地」と「水」だからなのか

今は燃えそうに熱い私の焦げ付く体は不思議とふわふわとした頭を撫でられながら、不思議な暖かさに瞼が重たくなった

商人が来るといふのは伝え忘れたが瞼は閉じてしまった

心地よさの中でも私の憧れは機構を占め続ける

ああなりたい

私はやっぱり

テスカトリポカになりたい

そうすれば

そうすれば仲間外れじゃないと考えたから――。――。

## 第五曆 コアトル

この挨拶もおなじみになってきましたね

どうもシロネンです

昨日は色々とありすぎました

料理だったり、新しい嫁さんだったり、保管庫の血の付いた袋だったり

・・・保管庫のものについてはテスカトリポカに聞こうと思います  
今すぐは無理ですが私も考えて落ち着いて聞きたいので  
とまあ何はともあれ昨日テスカトリポカが言った通りなら  
今日は宮殿に一日中いて、商人を呼んで買物をする段取りだ  
起きたアトラトナンにもその事を伝えたと昨日の今日なのか  
喜べばいいのか感謝するべきなのか

テスカトリポカが他者にものを買うという絵図が想像できず  
お互いに混乱しつつも宮殿に朝食を作りに向かう

「おはようさん朝飯出来てるぞ」

へああ？

食卓に向かえば料理が乗った皿を敷物の上に置いている全能神が  
いた

戦神テスカトリポカが料理を用意して配膳してる

「えっ!!? 貴方何してるんですか!?!」

「そんなに驚いた顔するなシロネン、アトラトナン」

いやだつて料理できたんですか? 意外過ぎる

しかもしつかりと美味しい

もぐもぐ もぐもぐ もぐもぐ

誰も何も発せないまま食事の時間は過ぎていく

「…………美味くなかったか?」

「え」

「へ?」

テスカトリポカのしゅんとした一言に食事の手が止まる

作ってもらったのだから感想によって性格が変わるのは大変かと

考えて美味しい料理に夢中になっていた  
ジャガーの内側に折れた獣耳がテスカトリポカの頭部に見える  
少し意地悪を試してみたくなってしまう

「テスカトリポカでも傷つくんですね」

「いくら俺でもその言葉は・・傷つくぞ」

意地悪はやっぱり逆効果だ次はやめておこう

結局三人とも無言のままに食事終えた

商人が来るまで時間があると言われ

アトラトナンと一緒にジャガー保育所で幼獣達と一緒に戯れる

私は長い紐を垂らし、紐の先を捕られぬよう幼獣達をじやらす

アトラトナンは初めて見る幼獣達にどう接すればいいかわからず

ジャガーマンに抱え方を聞いているようだった

と余所見に集中していると紐がとても重くなっていた

紐を捕らえた幼獣達を紐から離し、またじやらす

捕らえて、離す、それを繰り返す

これはテスカトリポカが来るまで続いた

迎えに来られた私達が一室に入ると

すでに布、糸、工芸品、織物、宝飾品、服、植物の苗

調理器具、香木、花、靴、まだまだあつた

持ち込まれた品々の多さに怯み、一步下がる

「どうしたシロネン」

「品々の多さに思わず怯んでしまった」

「臆するなシロネン、自分の欲しいものを見極めるのもまた戦いだ」

欲しいものを見極めるのも戦いか

品々を持ち込んできたマクイルシヨチトルは商売の神ではなく

宮廷の人々の守護神、ゲームと賭博の神であり余り商売に係は無

さそうだが

賭博は品物と金品の流れを動かせる。つまり商売にも関わりがあ  
り

数々の品物を取り扱えることができ、良い品か悪い品かに巡り合え  
るかも

気に入った物を買うために金を賭けるのも賭博の範囲ってワケ  
品物を手に入れる為に金品を失う

ただし本当に自分にとっての必要なものはわからない  
なるほど確かに賭博の範囲内なのか

となるとますます私の欲しいものがわからなくなってきた

私の望みはテスカトリポカになりたい

でもテスカトリポカが欲しいという訳ではない

自分の衣服を確認する為ゆくり一回転する

服と靴はほつれも汚れも傷もない

手首と二の腕と耳につけた装飾品も傷がない

私自身は新しい服と宝飾品は別にいらぬ

それに服も靴もまだ保管庫にある、今着ている白の貫頭衣も問題は  
ない

靴も紐がほつれていないし問題はない、化粧は皮膚が痒くなるので  
出来ない

宝飾品も無くすと悲しいのでつけたくない、調理器具もまだある

植物の苗も花もあまり興味がない・・・何もないな私

改めて自分が欲しいものが何もないとため息をつく

だがテスカトリポカが欲しいものを見極めろと言った以上

もしかしてこの中に私の本当に欲しいものがあつたりするのか

テスカトリポカの憧れ以上に私が欲しいものあるのか？

アトラトナンは何やらマクイルシヨチトルと話をしている

欲しいものが最初から決まっていたようだ

私も欲しいもの、欲しいものと品々を右往左往と見つめ

移動しながら品々を見る、探す、考える

ふと花と緑の美しい羽根飾りが目に止まる

金盞花と大きな鳥の羽飾り？

その二つの品物前に近づき観察する為にしゃがむ

花籠いっぱい収穫された金盞花

近づくとびに独特な匂いが鼻をくすぐる。不思議な香り

香りという言葉にひらめいた私は籠を手を持ち

ジャガーと戯れるテスカトリポカの元に急ぐ

テスカトリポカは選んだ品物を持った私を見て笑い

「シロネンそれが欲しいのか」

「違います」

「違う？じゃあ何で持ってきた」

私のおんまりな返答にテスカトリポカは目を開く

じゃあなんで持ってきたといわんばかりの態度だ

ではこの回答もきつと驚くでしょう

「テスカトリポカと同じ香りが欲しい」

私が欲しいもの 私が憧れるのはテスカトリポカ

でもすぐには叶わないのがテスカトリポカになるということ

なら香りからテスカトリポカでもいいんじゃないか

今の私が一番欲しいもの

「他にも香木があるのに態々俺の香りがいいのか」

「はい私テスカトリポカの事大好きですから」

今の私が今一番好きなもの

好きでなければ憧れないはずだ

だからテスカトリポカが大好きと言っても良い筈だ

私はテスカトリポカが大好きでテスカトリポカになりたいんだ

それが今私が考えて、欲しかった答えだった

どうだ！驚いたでしょう！！凄く考えたんですからね！

だというのに・・・

ジャガーマン急に「若いわね!!お姉さんそういうの大好物!!!」

アトラトナンどうして口元を両手で抑え、顔を真っ赤にしているの

？

マクイルシヨチトルは頬に両手を当て黄色悲鳴をあげた

テスカトリポカは天を見上げている

なんなんだもう!!

「シロネン」

はいなんでしよう

テスカトリポカと同じ匂い買っていただけですか？



私の前まで顔を近づけたテスカトリポカは

「俺以外には絶対に言うなよ」

「駄目？」

「絶対駄目」

真剣な目をしてそういった

わかりました 言いません

買い物が終わわり、夕食もテスカトリポカが作るというので

私は赤子達の部屋とトウモロコシ畑の確認をしに

アトラナンは宮殿に新しく作った水園の確認に向かった

「今日は仕事するなど言った筈だが？」

とテスカトリポカに咎められたが見に行くだけと

無理やり押し切り確認しに行った

確認しに行く途中赤い袋があつた保管庫の前を

通つたが目の前を通るだけにした

その後はいつもと何も変わらず

食事をし、後宮に戻り、眠りへとついた

今日は本当に楽しい一時だった

それから暫くして 第一の太陽が終わつた

本当に唐突に終わってしまった原因は何かと聞けば

“ケツアルコアトル神がテスカトリポカ神を海に叩き落した”

絶句

驚きのあまりに表情も顔に出せない

仮にも第一の太陽を後ろから海面まで叩き落す

なんという蛮行!!無策!!考えなしにも程がある

誰からそんなことを聞いたかつて?本人ですよ!!

ケツアルコアトル神が私の部屋に来たんです

少し時を戻して説明をします

テスカトリポカ神は嫌な予感がすると言って

私達が起きる前に宮殿を出て行ったのです

そして私が目を覚ますと窓枠には見知らぬ男神

農耕と水の神テスカトリポカの兄弟にして最高神

ケツアルコアトルその神がいました、姿身は知らなかったけれど自ら自己紹介をしたので名前が判明しました

「あのケツアルコアトル神？なぜここに？」

テスカトリポカの宮殿に用があるなら

宮殿に行くはずだ何故私の部屋、しかも後宮にいるんだ

ジャガーマンに言っただけでテスカトリポカを呼んでもらうべきか？

「あの陰湿野郎でしたら暫くは帰ってきませんよ」

「帰ってこない!？」

「私が海面にあの野郎を叩き付けたので！」

何をやっただっただけで？今の時代を担う神を叩き落した!？」

暴力的な言葉に機構が停止しかける

でもどうしてテスカトリポカが帰ってこないんだ？

「あいつ今いる人類全員滅ぼすのに忙しいですから」

機構停止

最高神クラスの規模が大きすぎてわからない

今ある時代を担った神が滅ぼしに行く？次の時代の引継ぎの為に

今ある時代を破滅させ新たな時代を再生させる

引継ぎの為にテスカトリポカは遅くなるのか

でもどうしてここに来たんだろうか

宮殿にテスカトリポカがいないことは一番知っているだろうに

「私がシロネンちゃんに会いたかったからデス!!」

「何言ってるんだこの最高神」

無茶苦茶だ!!会いたかったから後宮に来た!？」

よりよって家主がいない他人の妻の部屋に!!？」

この自由さはテスカトリポカに似ているのか？一応兄弟神だし

「シロネンちゃん今とつても不愉快な事考えてませんか？」

「いいえ!!それよりも何れは帰ってくるんですから!早めに出て行って

てください!!」

こんな不貞現場のようなところテスカトリポカに見られたくない見られでもすればどうなるか、先ず間違いなく私が悪いのだろう

何も言い返せない状況に顔を俯かせるこんな時どうすればいいかわからない

服を握りしめる、ふと足元に大きな影がかかる何だと前をみると私の顔の前にケツアルコアトルの顔があった

「突然お邪魔して怖がらせてしまつて申し訳ないね女神シロネン」

「へ？何を？」

ケツアルコアトルが私の前で膝をついて謝罪している

何が起きているんだ

「何故膝を折っているのですか!？」

「会いたかつたとはいえ急に押しかけてしまったことは申し訳ない」

「いやそれは本当に怖いです」

「テスカトリポカがいない間に君に会いたかつたんだよ」

「へ」

テスカトリポカがいない間に私に会いたかつた？

それ一体どういふことなんですか

テスカトリポカが険悪だからとかいうわけではなく

いない間に会いたかつた？

「このまま婦人の部屋に居続けるのもイケマセーンネ！では私は帰ります」

「いろいろと何もかもわからないんですが!!」

「ではこれだけは覚えていてくださいー私には貴方の味方ですと」

「・・・味方？」

「何があつても貴方の味方つてことデス!!ではサヨナラ!!」

窓から一瞬で消えたケツアルコアトル神を見送るしかなかつた

・・・私の味方？何があつても私の味方

起こした身体を寝台に戻す

「いつたい何なんだあの神は」

噂通りの考えなし、噂通りの自由奔放さ

何も考えずにテスカトリポカを蹴り落した

何も考えないで行動できるその様は羨ましいと感じる

天井を見つめながら何も考えないでいると

誰かが走ってくる足音がする

「シロネンちゃん!! 大変大変!! テスカンが! テスカンが!」

「どうかしたんですか?」

「第一の太陽からリストラされちゃったー!!」

少し違うけど大体あつてる不当強制解雇といった方が当てはまる  
かもしれない

ジャガーマン急いで来てくれたんだらうけどごめんそれさつき聞  
いたんだ

蹴り落したご本人から

「だから今日のテスカン機嫌最悪だから宮殿内に来ちゃだめだよ!!」

「行ったら何かあるの?」

「テスカンがシロネンちゃんたちにDVする」

それは初耳だ? DV? やりそうだけどやるのかあの人

「お姉さんそんな愛は許しませんからねー!!!」

そして現在

宮殿内のあちこちから物の壊れる音が聞こる

テスカトリポカが暴れまくっているの音です

ケツアルコアトルから一件を聞いた私は嫌な予感がして

宮殿内にあるもの全てを後宮内に避難させました

見回りをしている蛇やジャガー達はそのままに

ジャガーや蛇の赤子達を後宮内に避難させて

今はテスカトリポカの機嫌の様子見しています

後宮から宮殿に繋がる唯一の入口は

テスカトリポカが自身の機嫌の悪さを考慮してか

自ら入れぬようにに魔術で壁を作っていました

そして今何の気兼ねもなく暴れまわっているのです

機嫌が自然と治るのを待てばいいが

治るのは一体いつなんだ? テスカトリポカの役割は?

戦士たちの休息所の主としてはどうなるんだ

彼の機嫌が収まらない限り戦士たちは癒されない

それではテスカトリポカは満足しないだろう  
いけない止めなくては、テスカトリポカに仕事をさせねば  
私の仕事の意味がなくなってしまう!!

意を決して後宮から宮殿に向かう

壁は後宮側からはすんなり入れたようだった

テスカトリポカを探そうと暗闇の中目を凝らし

とある一か所に暗闇に光る瞳を見た

瞬間私は背を向けて走り出した

さっきの気合はどうしたって!? 想定と違った

まだ正気のまま理性があるまま怒り狂ってると思った

対話できると考えた! けどあれは普通の目じゃない!!!

めがふつうじゃない

あれは歩くのと同じように

暴力を振るえる神だ

そうだどうして考えなかったんだ

いくら話せてもテスカトリポカの本質は戦神

戦いを巻き起こす混沌の神であるということをと!!

叩き落された疲労なのか目が胡乱だった!

足音がする 一步一步軽やかな足音が宮殿に響き渡り走っている

火も月明りもない完全な暗闇の中手探りで宮殿の中を逃げ回る

黒い蛇に飲み込まれぬよう黒いジャガーに引き裂かれぬよう

音が走るまま前に前へと考える間もなく逃げ回る

すると後ろに誰かの気配がした

「逃げんなよ」

笑ってる いや怒っているあれは獲物を狩るための笑みだ

見なくても納得する 振り向かなくても理解する

例えオセロメーの仮面をつけていてもわかる

いまジャガーが獲物を引き裂く為に噛みつくために

体力を消耗させようとしていることに

すぐに追い付けるだろうに、わざと距離を保っている

そうか遊んでいるのか! 私で遊んでいるのか!!

遊びにしかならないのか遊びにもならないのか  
腰に護身用にとつけた黒曜石の短剣を取る

余裕すらも動作されも許されず

無我夢中で走りながら追い立てられる

一瞬の油断もなかったが暗闇に目が慣れず

一瞬壁に手をついてしまった、油断を見逃す戦神ではなく

当然のように攻撃を行ってきた

ジャガーの爪をあしらった三本の太い針が風を裂き私の背後を撫  
でる

「いゝっ!!ああああああああああああああああああ!!!」

爪が背中を舐める、浅くでも堪能するように力を込めて

三本の爪が背中を走りきる。熱い熱い舐められた背中が熱い

機構全体が本能で泣き喚き騒ぎはやしたてる

―逃げろ―

でも私の本能や考えは違った

―死ぬ前に刺せ―

私は私の機構より私の本能を優先した

左手で腰から黒曜石の短剣を持ちテスカトリポカの

義足ではない足に無我夢中で何度も刺す

何度も何度も必死で刺す、刺し続ける

刺しているのに

血が出ているのに

本人ははただ私を見て笑う 本当に愉快そうに

「はは!!俺に黒曜石刺してどうすんだよトリ公!!」

笑う 笑う 笑う 笑う 笑う 笑う 笑う 獲顔

テスカトリポカは私の左手の上に

黒曜石で出来た義足をゆっくりと乗せて

容赦なく黒曜石の短剣ごと左手を踏みつぶした

もう声は出ない 未知の感覚に声も感情も何も出せない

目の奥の熱さは何度も感じているが何も流れることはない

全身の痛み 踏みつぶされた箇所からの痛み 目の奥の痛み

何もかもが初めてで何もかも出来ない 何もかもが許されない  
ガチャつと何かが外れる音が頭上でする

テスカトリポカに視線を動かす

仮面の下あご部分を外して口が見えるように

見せつけるように舌を出したと思えば地面に膝をつき

私の頭の位置に手をついた

四つん這いの体制で私に覆いかぶさったテスカトリポカは

背中を歯で噛みちぎり、出来たばかりの傷口を舐め回す

傷口の血を止めるようになめとるよに舌で舐める

わけのわからない情報恐怖に頭だけでも逃げようとする

すぐに頭を地面につけられ、首を軽く噛まれる

ー動くなー

踏みつぶされた左手も丁寧丁寧に舐めとられていく

持っていた黒曜石は唇で丁寧に取り除かれる

そしてまた背中に戻り傷口を舐められる

もう血は止まっただはずなのに舐め続ける

これではまるで・・・つまるでっ!!

度の過ぎた悪戯をした幼獣を懲らしめている成獣ではないか

きつく叱っているのか！遊んですらいなかった!!

これはただの躰だった！礼儀だった！遊んでもらえてすらいな

かった!!

情けなさすぎる

口がわなわなと震え、目と鼻の奥が叫ぶ

目を強く閉じ眼に焼き付ける、唇を噛みしめ刻みるつける

今日の恥ずかしさと悔しさと熱さを忘れぬように

お前の立場はあくまでも下だと

言い聞かせているようで

一通り満足したのかテスカトリポカは覆いかぶさるのをやめた

私が抵抗しないことに気をよくしたのか満足したのかはわからない

い

次にテスカトリポカは私の頭を掴み強制的に膝を立たせるような

姿勢にした

もう屈辱が終わるなら何でもいいと抵抗はしなかった  
それを罰を受け取る覚悟だと思ったテスカトリポカは  
私の背後に三本の太い針がついたものを押し当てた

丁度心臓ぐらいの位置に力を込めて押し続ける

肉が食い込んでる感覚に意識は飛び続けた

背中から骨を肉と骨を貫いて私に心臓を

焼いてる!!自分の指先を炎のように燃やして

心臓を取り出すのに邪魔な血管を焼き切っている!!!

もうなにもわからないむねからはりがみえる

ちがでて くちからもちがでて

きらきらひかるなにかがでてきた

しらく ひかる しんぞう

それを最後に私は意識を手放した

俺の宮殿でケツアルコアトルの匂いがした

腐れ縁の気配、しかし今回の事はいくら何でも度が過ぎている

今更奴の兄弟面をするつもりはない、そもそも何方が先などあまり  
関係がない

だが同僚として同じ最高神として今回の事は許しておけない

白く光るケツアルコアトルの心臓を見ながら

今回此奴に行った躰の数々を思い出す

これでこいつもしばらくは大人しくするだろうと溜息をはく

自由にするのはいい、奔放なのはいいだがそれも責任が取れての話  
だ

第二の太陽はトリ公に決まっているだろうが主宰となる以上役目は  
果たしてもらう

にしても弱くなり過ぎじゃないか



いくら俺をけり落したペナルティがあるとは言え  
弱すぎるまるで一度も戦ったことのない非力な幼獣の様だった  
それでも足に刺し続けたのは戦士たる気概だった  
だがこいつは神で戦士ではないだから俺の楽園には迎え入れない  
それにしてもトリ公の遅すぎる起動時間に声をかける

「おいケツアル・・・」

自身に身体を預けて気絶した誰かが鮮明になる  
この重さは戦士のそれではない、腕のしなやかさは戦士ではない  
神の肉を育てる果報者のしなやかさと重さ

シロネン

じゃあこの白く光る心臓は

機構が鮮明さを取り戻し、一斉に冷静になる

シロネンの機構は無事だが体は損傷しすぎている

神であるシロネンが死ぬことはないが、俺の手で治せない和不味い

何の為にシロネンを自らの領土から出さず

他の神からも隠してきた意味がなくなってしまう

今までの努力が無になってしまう

俺の不運さのせいでこの事態を招いてしまったかと

自嘲する余裕は今はない

自らの神格を青へと変化させ

手首の皮膚を食いちぎり、出血させる

傷口から流れる血をシロネンの心臓に注ぐ

白かった心臓が青く青く浸食していく

「けっほっ」

シロネンが僅かながら息を吹き返した

吹き返したことに安心せず、神格を赤へと変え

指先に火をともしシロネンの胸元に近づける

胸の皮膚と皮膚を寄せ心臓を閉じるように指先の火で癒着させる

シロネンの皮膚が溶け心臓が閉じたのを確認し

背中も同じように溶かし同じように閉じたのを触診して一息をつ

く

「あの野郎俺がいない間にシロネンにあったのか」

シロネンからケツアルコアトルの匂いがしたということはシロネンは俺のいない間にトリ公と接触したということか匂いが移るような距離で話し合ったかと思うと

冷静さを取り戻した機構が本能のまま

ケツアルコアトルを殺しに行こうとする

だが今はシロネンの治療に専念しなくては

不本意だが主宰という仕事がなくなつたので

シロネンの治療と回復には付き添えるだろう

今回ばかりは八つ当たりにも程があると

頭を抱えざる負えない

だが付き添うのは監視のためだ

シロネンはケツアルコアトルに接触してしまつた

このままではシロネンはトリ公になる

白いケツアルコアトルテスカトリポカになつてしまう

渡さない渡すか

渡してなるものかこれは俺の物だ

シロネンは俺だけの物だ

神に備わっていない個への集約

執着か俺らしくもない

だがするとも、なぜならシロネンは

テスカトリポカ（俺）でもあるからだ

取りあえず意味なく暴力を振るつた詫びは何が良いか

服は喰いちぎり引き裂き使い物にならなくなつてしまつた

・・・そういえば脱がせた服は白色だったな

丁度良い買い揃えた服を贈ろう、新しい靴も装飾品も

贈つた服を着たシロネンは、愛らしさを今以上に引き出すだろう

黒が良いか赤が良いか青が良いか白以外なら何でもいい

痛みでうなされる横たわるシロネンの額に自分の額をくっつけた

一言一言魔術をかけるよう優しい声で言い聞かせた

お前はケツアルコアトル白いテスカトリポカではない

シロネンはテス<sup>赤</sup>カト<sup>青</sup>リボ<sup>黒</sup>カ<sup>か</sup>のものだ

## 第六層 ミキストリ

テスカトリポカ神が第一の太陽から下ろされ

第二の時代 第二の太陽「ナウイ・エエカトル」が始まった

テスカトリポカ神はケツアルコアトルに世界の引継ぎをし終えた  
後も

怒り収まらず宮殿内で暴れ回っていた

だがそのままではテスカトリポカ神の役割は果たせないと思い

直接会いに行つたがまあくつ何にも出来ずに終わった

狩りでも蹂躪でも遊びでもないあれは騷だった

悪戯をし過ぎた子供に対するただの騷だった

最初から最後まで立場は下だと思ひ知らせるための

暴力とお仕置にすぎなかったのだ

そんな騷をテスカトリポカ神に受けた私は今どこにいるかつて？

テスカトリポカ神の部屋の中です

何なら筋肉質の右腕枕が後頭部にあり

顔を横に向ければテスカトリポカ神の胸が見えます

私はもう情報処理が追い付かず思考停止状態ですが

身体は何にも触らぬよう両腕で

腕を組み、足は真つすぐと延ばしています

もうテスカトリポカ神が起きるまで一切動きません

天井のしみでも数えて待っています

視線を少しだけずらし外の様子を確認する

変わらず太陽は登り朝日が照っていた

どうやらもうお昼のようだ、後宮にいる皆は無事かな

と他人事だけを考える

「ん・・・起きてたのかシロネン」

ええ目が覚めればもう寝れませんよこの状況

テスカトリポカ神は瞳を瞬きしまだ寝たりないのか

名残惜しそうに顔を左手でこすり大きく欠伸をした

「胸と背中に違和感はないか？機構に損傷は？」

「気を抜けば痛いですが特に違和感はありません」

昨日あれほど激痛をおった体は今集中すれば痛い程に痛みが引いて身体はどうやら手当されていた

そういうえば誰が私の体の手当てをしたんだろう

損傷個所が多かったから服は脱がす必要があったはずだ

それに今着ている黒色の貫頭衣も誰が着替えさせたのか

髪も顔も身体も地面につけられたとき泥にまみれたが

今はどこもかしこも綺麗な状態だ。とてもさっぱりしている

もしやアトラナンに頼んだのか？ならば礼をしないとイケない

「テスカトリポカ神」

「なんだシロネン」

「アトラトナンにお礼をしたいんですが」

「何の礼だ？」

「私の怪我の手当てと服や身綺麗にさせていただいた礼を」

「ああそれ俺だ」

本能でテスカトリポカ神の胸に渾身の頭突きをする

餌付いたような声が聞こえたが無視をして話す

「・・・私の服を脱がせたんですか？」

「そうしなきゃ手当ても体も更けなかったからな」

「じゃあ着替えさせたのは」

「着替えさせたのも俺だ」

「私の裸はあまり見てませんよね!？」

「いやじっくり見た」

「はっーーーーー!!!?」

はぁーーーーーっ!!!?何言ってるんだこの暴君!!

そこは「いや治療も兼ねたから見てない」でしょうが!!

何の悪びれもなくむしろ当然のように見たっていったぞ!!

人の機体を見たって!!丸裸を!じっくりって!!

じっくりって言ったよね!!今!!

あんまりな返答に顔を真っ赤にし不動の誓いを終わったので

思う存分テスカトリポカ神の胸を殴る

「これから嫌って言ってもみるんだから

今堪能しておいても良いとテスカトリポカ思うワケ」  
堪能するのは当然だという顔で返したぞ!!

・・・あれ？今聞き間違いじゃなければ

嫌って言ってもって言った？嫌というほどではなく

私が嫌って言っても見るって言わなかったか???

「ちなみに私の拒否権は？」

私の質問にテスカトリポカは何も答えなかった

ただとても笑っていた

テスカトリポカは笑うだけだった

笑ってない目で笑うだけだった

。。。あるとでも？

そう決定しているようで何も返せなかった

結局身体に出来た傷跡は消えなかった

怪我が酷過ぎたのか治療した時の火傷が酷過ぎたのか

身体に出来た傷が完全になることはなく

胸と背中には大きな傷跡ができた。だが私は嬉しかった

テスカトリポカ神に挑めたのが嬉しかった

あちらは度が過ぎた悪戯への躰であったが

何にも怯まずテスカトリポカ神に挑んだ結果だった

思わず鏡で何度も確認してしまう

挑んだ結果がしつかりと機構に刻まれている

それが溜まらなく嬉しかった

どこか薄暗いような気もしたが

喜びの前には考えさえもよぎらなかった

第一の太陽としての仕事の引継ぎも完全に終わり

ミクトランパや戦神としての役割が主となった

テスカトリポカ神は宮殿に入れる間は必ず

アトラナンと私を部屋に呼んでいるといつても

私もアトラナンも宮殿での仕事があるから

1日中テスカトリポカ神の部屋にいるという訳ではなく  
休憩や仕事が終われば次第テスカトリポカの部屋で過ごし

夜はまた後宮に戻って就寝する。今までの日常の中に  
テスカトリポカと交流することがよく増えた

ただアトラナンがいない時にテスカトリポカ神は必ず

私の首を片手で撫でる。ジャガーが毛づくろいをするように  
ただ撫でる。その時の目はどこか遠くを見ていた

私は見ていなかった、一体どこを見ていたのだろう  
きつと聞けば答えてくれただろうだけだ

私はテスカトリポカに聞かなかった

この答えを聞くのも穏やかな時間を過ごすのも

これからずっとずっと後のことになる

この後宮殿で起こる一騒動の後

私はテスカトリポカの宮殿から逃げ出した

テスカトリポカ神と話すのもこれが最後だった

テスカトリポカと話が出来たのは神にとっては一時の時代。

私が第四の太陽として時代を担い、テスカトリポカ神に裏切られた  
時代。

第四の太陽の時代「ナウイ・アトル」の後である。

今日は全員の仕事が早く終わり誰も用事がないというので

テスカトリポカ神、アトラトナン、私の三人一緒に

料理を作ろうという話になり、全員で食材を用意する為

食糧庫に向かい足を進めていると先頭に立っていた

テスカトリポカ神が私の位置に避難したその直後

テスカトリポカ神がいた位置が廊下ごと削れた

廊下が削れた衝撃で発生した瓦礫には当たらなかったものの

テスカトリポカ神がその位置にいれば重傷は免れなかったことは

一瞬で削り壊れたその位置の惨状が物語っていた

テスカトリポカ神が衝撃で生じた

土煙の中にいた人影を睨みつける

それは見知った忌々しい相手をみる目だった

土煙の中から声がする。一度後宮で聞いた声だった

土煙がから出てきたのはマカナを持ったケツアルコアトル神

ケツアルコアトル神はマカナをもったまま私達を見る

「ごめんなさいねお嬢さん方急に怖がらせてしまつて」

「トリ公先頭を歩くのは俺意外とは考えなかつたのか？」

もし自分やアトラトナンに当たっていれば

どうなつていたかとは想像したくない惨劇である

おそらくそこに誰かいたという結果

肉片のかけらと血の跡しか残らないだろう

最悪な惨状を想像をしたアトラトナン

私を抱きしめる腕はとても震えていた

怖くないよと落ち着かせるように私は

アトラトナンの腕をさすつた。

一体何の為にケツアルコアトル神が、今の時代の太陽が

テスカトリポカ神の宮殿に重傷確定の攻撃をしたのか

今は全くわからない。このままでは二人は戦いを始め

この宮殿は後宮も何もかも更地になつてしまう

それではいけないと両者を何とかいさめ

部屋の中で決着をつけましょう。ただし言葉でと

その廊下から近い空き部屋に向かい

部屋に入りお互い向き合つて床に座れば

フセジ・エエカトル  
両者口論の嵐

二人の口論は長くなりそうなので

私は先にケツアルコアトル神からのお土産である

ケツアル産のトウモロコシをいただく。

だつて晩御飯前だったのでお腹が空いていたのだ

まだまだ神としても育ちざかりな私であつた。

「シロネンちゃんに大怪我させたようですね!!」

「何でお前と関係がある!? そもそも誰から聞いた!」



「シヨチピリですよ！マクイルシヨチトルが

次に商売に行ったとき大怪我していて

気になる品物は全部運んで見せていたってね！」

「確かに怪我をさせたのは俺だ！だがそれと

シロネンお前に何の関係がある!!」

二人の口論は益々燃え盛っていき

もはやただの喧嘩である

手がまだ出ていないのが不思議だ

声も段々と大きくなっていき

一声一語までも聞き取れてしまう

アトラトナンは喧嘩する二人が怖いのか少し怯えている

私は変わらずトウモロコシを食べ進める

「私と間違えたでしょう!!いくらこの子が私の化身だからって私本人

ではありません!!」

「ああ!?シロネンがお前が元だと!!此奴は俺のものだ!!」

「ええ!!お前は認めたくありませんけど!この子は白のテスカトリポ

カたる

私ケツアルコアトルの化身です!!その子に八つ当たりをするなん

て!!」

え

「俺だって認めたかねえがな!だから此奴は俺のものだ!テスカトリ

ポカのものだ」

私とアトラナンが硬直する

ここだけ世界が止まったかのように

静かに二人の声だけが響き渡るように

「白のテスカトリポカの化身のシロネンはいらなんだ!!」

「テスカトリポカっ!!貴方がいい加減に・・・っ!!」

「シロネン!」

アトラトナンが私の顔を見て声を張り上げる

どうしたの?アトラナン私の顔が何かついてる?

トウモロコシが顔にでもついていた？

自分の口の周りを触るとなぜか濡れていた

トウモロコシの果汁かと考えたが

どうやら違う、次々に私の手が濡れていく

ぼろぼろとはらはらと

なにかがながれていく

目からなにかおちていく

へやが前回のテスカトリポカ神が暴れた原因で歪んだのかな

それとも今回のお二人の争い（未遂）が原因か

天井から水がしみ込んでいる。ぽつぽつと流れる

私の瞼に落ちて頬を伝って雫が落ちていく

室内にいるのにまるで雨の中にいるように

頬がだんだん濡れていく。

いつの間にか二人の口論は止み

部屋には静寂が訪れていた

ケツアルコアトル神もーずるい。

テスカトリポカ神もーずるい。

私を見ている二人を見てーずるい。

戦いを辞めたケツアルコアトル神を見てーずるい。

口論をやめたテスカトリポカ神をみてーずるい。

流れ続ける何かを考えずーずるい。

ついに口に出して言ったーずるい。

ずるい。

ずるい！ずるいっ!!

「私もテスカトリポカと戦いたいいいいいいいいいっ!!」

言葉の勢いそのままテスカトリポカ神に抱き着く

もうどうにもならない

私が戦おうとするだけで手も足も出ないのに

この二人は戦いを辞めた、いつでも戦えるからだ

いつでも戦えない私じゃない

私だって戦えないわけじゃないのに

止めることが出来るなんて  
ずるい!!ずるいと!

テスカトリポカ神を殴る殴る  
何のことかわからない私の言葉に

三者三様の反応を見せる

困惑、困惑、とても困惑

テスカトリポカ神は抱き着いた

私の方に向き直りどうした

どうした落ち着けと

「戦いたい!!一指報りたい!!遊んでほしくない!!戦いたい!」

機構を止めてもいい!神としてのシステムを失ってもいい!

私を見て!私と戦って!遊ばないで!躡らないで!

ちゃんと私と戦って!とどめさして

・・・私今テスカトリポカ神と戦いたい?って考えた?

私になりたいのはテスカトリポカでー。

私は自分の言葉に混乱した。だって私は憧れてー。

「いやお前戦士の体にはなれないぞ?そう細工したし」

「細工ですって!!?この野郎なんてコトを!表でやがれ!!」

「望むところだトリ公!!決着つけてやる!!」

二人が表に出ようとするので

私も行きたいと駄々を捏ねるように

腰に抱き着いたまま動かない

「私もしたい!!戦う!ケツアルコアトルの化身だもん!」

「駄目に決まってるだろシロネン!今のお前は此奴の化身などではな

い!!」

「お前の所為ですけどね!シロネンちゃん危ないから下がって!!」

「アトラナン!シロネンと一緒に後宮に戻ってろ!!」

私はアトラナンに預けられ逃げだそうとしたが

思いのほかアトラナンは腕力が強く逃げ出すことはできなかった。

「家出してやる!出ってやる!!」

私は最後の手段を大声で叫んだ。

ここにいてもテスカトリポカになれないなら  
私は宮殿から出てテスカトリポカ神になる為の

武者修行に行きます!!行つて!テスカトリポカになります!

この言葉にも何も反応見せないまま

テスカトリポカ神はケツアルコアトル神と宮殿の外に行つた  
後宮に戻つた私はまだアトラトナンに抱っこされたままだった  
私とアトラトナンは今後宮にある

アトラナンも私も何も言わない。いや言えない方が正しい  
同じ配偶神かと思えば、実はケツアルコアトル神の化身だった  
笑えないにも程がある。何を考えてテスカトリポカ神は

ケツアルコアトル神の化身を妻の座を与え、配偶神としているのか  
テスカトリポカ神は一体何を考えているのか――。

その思案に夢中になっていると。アトラトナンが私を椅子に下ろ  
し

私と向き合うように地べたに座り、私にお辞儀をした

まるで自分より上の神に拝謁するような丁寧さで

「まずは今までのご無礼をお許しく下さいシロネン様」

「シロネン様!?!」

私に様付け!?同じ立場である妻同士で様付けなんて

本当にやめてほしい!敬語も嫌だ!距離を感じてしまう!!

「アトラトナン!私に敬語も様付けもやめて!」

「しかし白のテスカトリポカ。ケツアルコアトルの化身

である貴方様を呼び捨てなどとてもできません」

「私が嫌だからやめてください」

「しかし・・・」

テスカトリポカ神の口から語られた私の正体。

ケツアルコアトル神は最高神の一人その化身であった私  
今は何もない私を畏まっていますが、それは私じゃない  
ケツアルコアトル神に畏敬の念があつたことだ

私の何もなくなったシロネンを見ていったことじゃない  
その悔しさの感情に流れる涙が止められない

涙にあんなにも焦がれたのに今は出る涙が邪魔だった  
出るたび出るたび何もなくなって渴いていく気がした  
目から水が出続けて結局私は何もなймаまだーーーー。  
でもアトラトナンが私をそう扱うことは  
そんなにケツアルコアトルの化身の方がいいのか？  
何も無い私は嫌なのか……「豊穰」の女神は嫌なのかな  
嫌な考えしかできない。それでも聞くしか無い  
アトラトナンに聞くしか無い

「アトラトナンは……私がケツアルコアトルの化身じゃなくて嫌だった？」

異質な「豊穰」は嫌だった？通例の「豊饒」じゃなく  
いいいの

ばちんっ!!

アトラトナンが自分の両頬を両手で同時に叩いた音だった。  
両頬に手形がくつきりと残っている。私は突然のことに泣き止ん  
だ

一息ついたアトラナンは立ち上がり私の隣に座った。  
身体は私のほうをむき、私の目を見て話し始めた

「……シロネン」

「……」

アトラトナンは私を見ている  
私を見据えている

「私は今貴方をシロネンではなく、ケツアルコアトルの化身  
として接しようとした。でも今の貴方はシロネン」

「……」

私はアトラトナンを見た

アトラトナンは私を見ている

最高神の化身ではなくーーーー。

かつてあった虚空ではなく

今日の前にいるシロネンをーーーー。

「貴方はシロネン。私と同じテスカトリポカ神の妻」

「うん」

「貴方は貴方。白のテスカトリポカの化身なんかじゃない」

「うん」

「貴方はシロネン。私の小さな先輩、そして大きな友人」

「うん」

アトラトナンは自分にも私にも言い聞かせるように

私の名前を呼び続けた。シロネンの名前を読んでもくれた

さっきの涙はもう出なかった。でもとても機構が暖かった

アトラトナンが私を見て話してくれている

私のことを見て話している。私の神名を読んでもくれる

今まで通りなのにとっても嬉しくて、嬉しすぎて

さっきの熱さとは違う熱さの涙が流れてきた

さつきよりも熱い涙。私が潤うような。

暖かい涙私の中にしみ込んでいく私の涙。

アトラトナンが私の名前を言い終わるまで

私も知らない渴きを潤してくれるまで

私は暖かい涙で機構を潤わせ続けた。

焼け焦げたあの場所から渴いてきたシロネン<sup>私</sup>

テスカトリポカになりたいという憧れの思いに近い

何も無いシロネンの渴きを満たす。何もわからない

でも私が求めてやまない何かがある

テスカトリポカになることで得られる何かがあった

それが何かは今はまだ何もわからなかったけれど

この一時が嬉しかった、嬉しかった

何も考えられないくらい嬉しかったのだ。

私の名前を呼び続けたアトラトナンは声も枯れて

顔は真っ青になっていた。力がなく今にも倒れそうだった

いや倒れるそう確信した時アトラトナンの身体を支えようと

私は自分の両腕を伸ばし受け止めようとしたが

予想外の神が後宮に現れたのだ

「よつと」

見知らぬ神がアトラトナンの身体を受け止めた  
その神は誰もが立ち止まる花のようで  
受け止める姿は気品に満ちた貴公子のようで  
優雅を花にしたような立振る舞いだ。

本当に誰なんだこの神は

アトラトナンの身体を支えている神は

私の方を向いて笑顔を見せる

花が周りに咲いたような――

あれ実際に周りに花が咲いてる

空中に花が咲いて浮いている

シヨチピリは花に夢中な私を他所に話し出した

「初めまして 豊穰の女神 シロネン。ケツアルコアトルの化身よ」

「私は奔放な神々にして、娯楽の守護神シヨチピリ。マクイルシヨチ  
トルとは友達さ」

「いきなり突然で申し訳ないんだがね シロネン」

「シロネン。君には死んでほしい」

「――――へっ？」

考える暇もなく豊穰の女神シロネンは死んだ。

シヨチピリ以外の誰にも分らず

ひっそりと息を引き取った。

そして後宮にいる女神の数は一柱になった

「また派手に怪我したにや〜」

「あの野郎鼻を回転しやがった。シロネンとアトラトナンは？」

「後宮にいるはずよ、あそこはテスカンお手製の守りがかかっているか  
ら

たとえば誰であつても中にいる人を連れだすことは不可能!!」

「だがトリ公との戦闘のお陰で後宮の守りが薄くなってしまった」

「だあ〜っ殺す気でくるからねククルンは」

「だがそれでなければいけないケツアルコアトルはそうでないと」

「シロネンちゃんは？」

「……あいつは鳥頭の化身ではない。俺に意見か？」

「いんやゝ疑問。王に対しての疑問ですよ」

「そういうことにしておいてやる」

「そうだそうだ今は確認したい」

俺のものがそこにあるかを確認したい

後宮に歩く歩く。鳥頭の所為で体はきしむが

今は俺の所有するものの確認だ

と高ぶる自信を落ち着かせるように

後宮の扉を開ける。手の中に収めたいように

妻たちの部屋を見る、アトラトナンは部屋で眠っていたが

シロネンの姿はどこにもみえない、というより

「……シロネン？」

シロネンの気配がどこにもしない

先ほどまであったシロネンの存在がどこにも……ない

シロネンが誰かの手を借りたのか、1人で逃げ出したのか

どちらかはわからないが、どちらにせよ許さない

興奮を抑えていた身体が高揚する。口が吊り上がるのを感じる

目が見開いていく、興奮を収めるようにシロネンの部屋をめちやく

ちやにした

今シロネンにつけられない傷のぶん部屋に傷を傷つけた。

もう壁が爪痕だらけで引っ掻く場所がないころになったころ

壁と同じ行いをシロネンに行う英気を養うため

アトラトナンの部屋に向かいそのまま眠りについた

シロネン。お前の願い叶えてやろう

ただし二度ともう二度と後宮の部屋から出さない

傷だらけにして二度と自分では何できないように

考えられないようにそうしてやる。

お前は戦士ではなく、俺の妻なのだから……。



## 第七層 マサトル

寝台から失礼します

おはようございますシロネンです

テスカトリポカ神の宮殿から逃げ出した私は

シヨチピリとマクイルシヨチトルと一緒に暮らしています

正直ケツアルコアトル神が来なければ

テスカトリポカ神がいる宮殿から逃げ出すことも

抜け出すことも出来なかったでしょう

正直見つかってしまったらそこで御終いの恐ろしい行動です

あの奇跡のような条件でなければいけなかった

そうでなければシヨチピリも私も命はなかったでしょう

寝台から身を起こし上半身裸の身体にマントを巻き付ける

えっ？シロネン女神なのに上半身裸？半裸？

着てた服はワンピース丈の貫頭衣じゃなかった？

上半身裸でも大丈夫ですよ

だって今の私は女神シロネンではなく男神

トウモロコシの神「センチオトル」が私のなまえの神名です

今の私の身体は女型機体ではなく男型機体ですので

ではシロネン改めてセンチオトル

私はセンチオトルです。

今の私はテスカトリポカの配偶神でもなく

「豊饒の女神」でもなく

ケツアルコアトルの化身にして

トウモロコシの男神 センチオトルと名乗っています

まあシロネンが死んだというよりは

ケツアルコアトルの権能の一部を譲り受けたシロネンは

機体が元の器では受け止めきれないので

私の原型である白いテスカトリポカの化身である

男神の形に女神シロネンが変形したのです

女神シロネンはあくまでも焼け残った

化身の痕、痕跡、焦げのような存在だった

だけどケツアルコアトルのトウモロコシ神の肉を食べたことにより

元の白いテスカトリポカの化身としての機構、機能が原型に近くなった

とはいえトウモロコシをもっと食べれば元の原型に戻れるというわけではない

アステカ神話では破壊の後に再生あれど逆行はない

一度破壊されたものは元の形には戻らず、新しい形をとって繁栄する

今の私は原型ではなく新しいケツアルコアトルの化身として構成されている

だがシロネンであった頃よりは非力ではなく神としての権能も増えた

何より今の身体は少年の身体で構成されており

シロネンであった頃よりも機構の強さと機能の強さが段違い。

今なら片手で木を握りつぶし、宝石に変えられる

木を宝石に変えられる程の握力を出せる

テスカトリポカ神の所に居れば決して手に入らなかった機能ちから

テスカトリポカ神の妻 シロネンのままでは絶対に出来なかった

権能ちから

私に出来ることが増えたのが嬉しくて

中南米神話世界の神なら誰でも持つ

仲間外れでも異例でもない普通の権能に舞い上がりました

誰の目も気にならない、誰の気持ちも気にならない

きつと誰も気には留めてもないだろうけど

それでも私は嬉しくて楽しくて

いくつもいくつも宝石を作ってしまった

だがこの機能も機構も決して正常ではない、私個人の機能や機構ではない。

これはあくまでもケツアルコアトルの権能と機構を一部譲られた

だけ

ケツアルコアトル本人は自身の削ったというのに、全く最高神として異常を来しておらず

今日も今日とて第二の太陽の座についている  
かつてテスカトリポカが務めていた太陽の座に、何食わぬ顔で平然として主宰を務めている

今までと比べ物にならないぐらいの  
機能を手に入れることが出来たけれど

テスカトリポカ神から一人で身を守れるかと問われれば、私は絶対に守れない

むしろセンテオトルに成りたての私では、すぐにセンテオトルとしての肉を剥がされ

中身のシロネンを引きずりだされるだろう

それだけは嫌だ折角テスカトリポカに近くなれる力を手に入れたのに

また何もない焼け跡だけのシロネンになってしまふ

例えテスカトリポカ神にもう一度焼き尽くされようとも

抵抗も反抗も出来ない無力のシロネンは嫌だ

そういえば私が今テスカトリポカ神から身を隠している場所

現在センテオトルが身を寄せている場所を言っていますね

私がいるこの場所はケツアルコアトルの領域

その領域の一角にあるマクイルシヨチトルとシヨチピリが

共同で暮らす宮殿で暮らしています

テスカトリポカ神の宮殿までとは行きませんが

広大な敷地を誇る宮殿です。それもその筈

この宮殿はケツアルコアトルの宮殿なのです

なぜこの二人を住まわせているかわかりませんが

この二人と私とケツアルコアトルと暮らしています。

といってもケツアルコアトルは仕事が忙しく、太陽の座から遠いこの宮殿には中々帰ってくることは出来ないのです

実質三神柱で暮らしています

センテオトルの役割はトウモロコシを育てること

根本はシロネンの時とあまり変わりありません

でも今は花も育てているんです

花の育て方を教えてくれたのはシヨチピリで

私が育てた花を買ってくれるのはマクイルシヨチトルです

売った花で新しい種や服や靴・・・偶に果物などを買っています

二人は欲しいものにしては気にするなと言ってくれましたが

私は二人に何も返せないので商売をしたいと無理を言いました

二人は納得しない表情をしていましたが何とか了承してくれました

ただし商売することに関して約束を二つかわしました

ひとつ 育てた花は必ずマクイルシヨチトルかシヨチピリに渡すこと

ふたつ 決して二人を通さずに誰かに育てたものを渡さない事

なんでも育てた花はシロネンとしての名残が残っているそうで

誰彼構わず花を渡してしまえばテスカトリポカ神が気づいて

ケツアルコアトルの宮殿に来訪しセンテオトルに成る経緯に

関わった神全てを引き裂きかねないと

特にセンテオトルに関しては自身の配偶神にも関わらず

男神と逃げ出しあろうことか敵対する最高神の化身に成長している

という言い逃れも弁明も何も言えない最悪の自業自得

先ず間違はなくテスカトリポカは何を言っても

何も聞かずに何もかもを辞めてはくれなだらうー。

わかっていたが私がしたこと

テスカトリポカ神が起こすであろう所業も

私の自業自得にも程がある

この一件に関してはテスカトリポカ神に

何をされようともどんなことでも受け入れるしかないが

アトラトナンが八つ当たりなどされていないか

何かひどい暴力を受けていないか

アトラトナンの安否が気になったので

マクイルシヨクトルに聞いたところ

「あれから何回かテスカトリポカ神の宮殿に行っているけど

アトラトナンの姿は見ていない、恐らく後宮から出されていない」

購入する品々の中には明らかにアトラトナンが好む品々があるが

テスカトリポカ神が全て選ぶだけで本人の姿形も存在もわからな

い

おそらくシロネンがいなくなったことで後宮から出さなくなった

後宮に監禁しているのかもしれないと

テスカトリポカがしても可笑しくない考えを口にした

後宮から出されていないなら

きっと宮殿の方にも出ていないのか

アトラトナン 大地と海の女神

彼女は広い広い水域が好きで

宮殿にいたところはよく二人で宮殿内にある小さな湖で

小舟に乗り、ただ水の上で水が流れる様を見ていたな

水が広くどこまでも流れていくのが好きな彼女

その彼女が水槽のような宮殿に閉じ込められているとしたら

会いに行きたい

会って無事を確認したい

でも会いに行けない

会いに行つてはいけない

会いに行つたらまた会いたくなってしまう

会いに行つたら何も無くなってしまう

何もかも無くなって何も無いシロネンに

特になんて事のない通常の権能

シロネンだけの異例の権能

でもアトラトナンはシロネンの名前をずっと呼んでくれた

何かを満たされた気がしたけれど結局何もわからなかった

それを知るためにも理解するためにも今はまだ

センチオトルでいたいそれ以上にも成りたい

私が何の不安も不満もなく何もかもを受け入れる為に  
私は私以上にあらゆる分野に精通する全能になりたい  
とまあ色々な思案と不安を考えながら歩いていると

自分が手入れをしている花畑が目に入った

ケツアルコアトルの方針で「自然はそのままが一番いい」

咲くも咲かぬも花次第だそうで庭園ではなく

適度に手入れをしながら放置するという状態だ

花畑は一面青青 蒼空色の絨毯

この花畑の花すべてはマクイルシヨチトルからの

依頼を受けて育てたもので何でもある夫婦神に

その夫婦神の名前はまだ聞いてはいない

二人いわくついてからのお楽しみらしい

花を渡しに行く時に私も一緒に連れて行ってもらえるようで

花の生産者の顔見せと今後の商売や独立のための知り合い作りの

為

そこまで考えていてくれたマクイルシヨチトルとシヨチピリには

一生の恩義と感謝しかない、それを少しでも返せるように

いつもよりも念入りに花の品質と色を調べる

何でもこの花を渡す夫婦神は誰でも知っている有名な二人

仲睦まじい仲の良い夫婦神一体誰なんだろうか

「シロネーン…じゃなかったセンチオトル!」

「なんですかマクイルシヨチトルどうしたんですか?」

花の納品までまだ期間がある筈ですがもしかして早まりました?」

「いいや期間事態はまだ余裕はあるんだけど

今花畑に入っても大丈夫か?」

「はい大丈夫ですよ花もほとんど咲いているので

あとは採取するだけです、でも花は踏まないように

小道の上を歩いてきてくださいね」

「良かったじゃあ少し花畑で待っていてくれ」

「はい?」

花の品質を確認する為にシヨチピリでも呼んでくるでしょうか  
それにしてもマクイルシヨチトルは慌てた様子で花畑から姿を消  
しました

一体何が起きているんでしょうか？もしや

ケツアルコアトル神が久々にご帰還なされたのか

マクイルシヨチトルが向かった方向に耳を澄ませる

「お二方こちらが依頼された花畑になります」

「なんて綺麗な花畑…まるで青空が花に落ちたかのようなね」

「この蒼空色の花畑全てが依頼していた花になるのかな？」

マクイルシヨチトルの他に声が聞こえてくる

誰か他の神を案内してきたのかな

声からして男神と女神かな？もしや依頼してきた夫婦神では

ケツアルコアトル神ではないとは言え礼を尽くさなければいけな

い

初めての仕事の依頼人との顔合わせかもしれないと

機構の鼓動が太鼓を素早く叩いたかのような幻聴が聞こえる

そんな逸る鼓動を抑えながら「初めましてセンチオトルです」――

と挨拶を交わそうとマクイルシヨチトル達が

立っている方に身体を向けた

見知らぬ男神と見知らぬ女神

そこにいたのは美だった

美しさという言葉の意味を知らなかったと

思い知らされるほどの美貌の女神

美しい女神と仲睦まじい夫婦という

言葉から連想される神々はたったの二人

この状況の意味に私の機構は一時停止した

動揺と混乱のあまり失礼とわかっていながらも

予想外の夫婦神じんぶつに確認の意味を込めて

目を開き大きく口を開け大きな声で叫ぶ

「トラロック神に女神シヨチケツアルっ!!?」

なぜここにテスカトリポカ神!ケツアルコアトル神!と同じ  
中南米神性存在最高神の一柱!雨の神トラロックがここに!  
花と喜びを司る女神であり工芸の守護神であり

トラロック神の妻である女神シヨチケツアルがここに!?

何も聞いてないからどう対応すればいいかわからないぞ!!

最高神ウルトラスーパーセレブの夫と美貌の女神対応の

見本を求めマクイルシヨチトルに以心伝心(偽)アイコンタクトを求める

ん?私がうろたえていることに対して何か不思議そうな顔をして  
いるな

いやでも私は何も聞いていないんだが

聞いても「お楽しみ〜」とはぐらかされたんだが

「……あれ?依頼人のこと話してなかったっけ?」

マクイルシヨチトルが頭をかしげる

その言葉で私は気づいたそうか賭博この人神

私がシヨチピリから聞いていると思っただのか!!

多分シヨチピリの方もマクイルシヨチトルから

聞いていると思っただのか何というすれ違い!!

そして私の確認不足!!経験不足!!

あらかじめ防げたかも知れないという失態に

考えつき想定も対応も何も全くわからないまま

初めて依頼人から仕事の成果をじっくりと見学されることになり  
ました

どうしよう…塞がれた胸の傷が酷く痛み始めた気がした



## 第八曆 トチトリ

どうもシロネンからセンテオトルになったものです

今私の機構からだは上下左右に動揺を隠せず振動しています

中南米の気候ではあまりない極寒の吹雪の中にいるようです

まあ吹雪を実際に見たことはありませんが

今は機構からだの震えとかあらゆる失態を気にする暇がないのです

そうですきつと私は後で後悔することになるうとも

この場から逃げ出すことは許されないので

そう・・・今私が花畑に案内している夫婦神

まさかまさかのトラロックご夫妻のご案内をしている最中なんです

それというのもマクイルシヨチトルが事前情報を何も報告せずいきなり依頼者本人が納品される商品の確認に来るとい

一大事なことを話してくれなかったからです

私の激しい動揺と動機はマヤウエルにも責任があります

気配を辿れなかったのかと言われれば何も言えないが

ああ：この場所自体は熱いのか

機構からだも思考も熱くて堪らない

は今も絶えず震え続けているというのに

「・・・大丈夫か？」

「ただただ大丈夫です」

恐れ多くもトラロック神に不安をかけさせるとは

その事実だけで更に機構が震え始めたような気がする

私は動揺を表にも裏にも隠すことが出来ず

思考も機構も反応も揺れに揺れることしかできない

一歩一歩一言二言の挙動、動作、思案に対して

何も対処することが出来ずにいる

無礼はないかと不安で機構が埋め尽くされて仕方がない

そんなゆらゆらと立ち上る陽炎のように

茹だつた機構と思考の先に

マクイルシヨチトルに対して何やら叱責をしている

トラロツク神の配偶神 シヨチケツアル様を見た

両手を細い腰に当て、柔らかな唇から白く小さな歯をのぞかせて

マクイルシヨチトルを非難しているシヨチケツアル

雨露すら濡らすこと躊躇いそうな艶やかな髪

花を柔らかく摘み取る細く丸い指先

空気や重さすら捉えられないほどの細い手足

まどろむ目 天空にも地上にも地下にもない色形

宝玉という名称さえ値しない

美しいという言葉 美しいという言葉でしか表せない

シヨチケツアルを表すのに当たって美しいという言葉は当然になる

その文字は意味は当たり障りのない最低限の評価になる

……男神の機構になつたから思考すら

そうなっているのか私は何と不純な！

セントオトルになつてから機構は熱いし

今も頭部の振動が鳴りやまない

頭部が照らされるように痛みが鳴り響いている

それはシヨチケツアル神を思考と視界に収めてから始まつた

なんなんだこれは、テスカトリポカ神の所にいた時とも違う

これは一体何の思考なんだ これは一体誰の気持ちなんだ

いやセントオトルである私が考えたのだから私である筈だ

シロネンの時にもこんな茹だる思考はなかった

眉をひそめて、目に力を入れて責めるように

睨みつけるようにシヨチケツアル神を見つめる

視線に気づいたのかシヨチケツアル神は

空気を感じさせないほど柔らかく花開いた

時間すら感じ獲させないほど花開くように微笑んだ

ああ その欲望知らぬ笑みを 叩き潰してしまいたい

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ

抑えられない！頭部の陽炎が酷くなる  
頭も視界も白い光がまばゆく点滅する  
日差しが入ったかのように周囲が白く陰る  
ゆらゆら　ちかちか　てらてら　めらめら  
ゆらりゆりりと視界が陽炎  
熱くなる思考にあらがうように  
足取りがゆらゆらと不安定ながらも足を進める  
捨てきれないシロネンの残り香の場所へ  
花など育てられない異物の夢の痕へ  
花畑へ

元のままでは叶えられなかった夢の中へ  
歩き歩き目的の場所に辿り着き  
トラロック神とシヨチケツアル神に紹介をする

「此方になります」

一言一音を口から吐くたびに  
喉も唇も熱くて仕方がない

二神を近くする視覚は今にも飛び出しそう  
機構の内側は燃え盛るように熱い

指も手も足先も毛先も何もかもが熱い  
いや本当に今日は暑い

機構が焼け落ちてしまいそうなほど熱い  
シヨチケツアル神は花畑に近づき花を指先で撫で  
私を見つめて微笑んだ

その女神を視界に収めたとたん  
機構と視界の点滅は激しさを増し

ついには過剰な衝撃と情報を処理しきれず  
私はそのまま後ろに倒れた

薄れゆく意識の中でセンテオトル!!と  
必死に叫ぶマクイルシヨチトルの姿が見えた

ああでも言葉は返せない・・・  
もうぜんぶあつくなくなるから何も・・・は・・・なせ・・・な・・・い

機構が段々沈静化していく音と情報吸収を辞めようとする  
思考停止（安全装置）に身を任せそのまま目を閉じた

綺麗な女だった 初めて美しいと思える女にあった  
機構の底から視覚の隅から理解する前に見ていた  
美しいという意味も

だが理解していたかと言われればそれは違った  
未体験だった 体験していなかった 知覚していなかった  
神として全能の知識は有していた  
ありとあらゆる知覚は持っていた  
だが経験は少なかった

全能であるが故の未経験

全てを有するが故の体験不足

なんとということだ

美しい!!美しい!!!あの女神は美しい!!

機構が熱くなる 機構の中心が暖かく動機をする 苦しい  
苦しい 焼け焦げるようだ あの女神しか考えられなくなる

それはこの にはあるまじき失態だ

あつてはいけない神としてのシステムが立ち行かなくなる  
殺してしまおうか 神としての平等が立ち行かなくなる事態など  
そのような異常事態などあつてはいけない!!

にそのような不平等など存在してはいけない!!

俺は立ちゆく全ての存在に力を与えるもの

一方に夢中になるなど存在してはならない

許さない この俺にこのような思考をさせるとは

ただ一目見ただけで今までの行為が無駄になるとは

許さない許さない許さない許さない許さない許さない

許さないぞ ショケケツアル!!

誰かの叫びが聞こえた

淡々として苦しんだ音が聞こえた

どうにもならない先に縋って苦しんだ声

顔はわからなかった けど声と音の大きさからして

自身の異常事態に怒りを隠していなかった

美しい女神シヨチケツアルを見ただけで

動揺と混乱と怒りを発生させた神は

異常事態解決に思考を重ねるのだった

神はおそらく夢をみない

見るとすればそれは既に経験した回顧録のはずだ

機構に蓄積された経験と体験からの過去の記録の自動閲覧

記録が勝手に再生されるだたの鑑賞

ただ一つ違うところがあるとすれば

この回顧録は私の体験と経験から再生されるものではなく

この再生は私の元になった神物 白いテスカトリポカ

ケツアルコアトルの記録ではなく 大元の神物

テスカトリポカ神の記録であるということだ

どうして私がテスカトリポカ神の記録を再生出来ているかはわからない

本当にこれがテスカトリポカ神の記録かと言われれば証拠はない

でも断言できるあの声は確かにテスカトリポカ神だった

機構の意識が段々とはつきりとしてくる

私のものではない回顧録から覚めていく

私はまだ自身の回顧録を再生できるほど

経験や体験はまだしていない

他の神達と比べてずっとテスカトリポカの庇護下にあつたのだ

でもこれからは違う私はシロネンではない

今の私はケツアルコアトルの化身 センテオトル

白いテスカトリポカの化身であり独立した一人の神

違うのだ違うのだ昔の私とは力も権能も違う

だけどうして

私の思考までもは変わらないのだろう

元の私に近づくことでテスカトリポカへの憧憬がなくなるという

恐怖心があつたのは確かだでも心の何処かで一瞬でも

テスカトリポカへの憧憬を捨てて楽になれると  
憧れに苛まれ続ける日々がなくなると考えてしまった  
それはとても恐ろしい思考だった  
シロネンの時には考えてもいなかったことだった  
結局今もテスカトリポカへの憧れは尽きない  
変わった今も捨てられないこの異常  
もしかしたらこの憧れは一つの可能性かも知れない  
この憧れがなくなった時私は全く違う神になるのかも知れない  
もしかすれば他の神達と同じくよく見られる神の権能を手に入れ  
て

ごく普通の神になれるかも知れないといでしょうもない  
どうしようもない憧れへの挫折からの逃避

それでしか満たされることのない欲望からの逃げ道  
欲しいものを手に入れようとしなない諦めの

あれはお前にはふさわしくないと語りかける愚者と賢者の甘言  
私は諦めることだけはしなかった

諦めることは出来なかった  
だって今しかなかった今で叶えたかった

一瞬で焼き尽くされた私の大元  
何も叶えられず焼き尽くされるぐらいなら

私は今のまま憧憬を捨てないまま  
私は今のまま憧憬を持ち合わせたまま憧れを叶えたい

そうそれらは全て  
機構からだと思考こころの底から尊敬し続ける全能神

テスカトリポカになる為に 彼の様になる為に

私は自分の思考で握った好機の糸を手放すわけにはいかない  
たとえその糸の先に獲物を狩り捕る幸喜な蜘蛛がいたとしても  
私はこの好機を手放さない

長い長い回顧録と思考から完全に目が覚めると

トラロツク神とマクイルシヨクトルが私の顔を見つめていた

テスカトリポカ程とはいかないが両者とも中々に鍛え上げられて

いて

機構がとでもでかい、人間でいうところの成人男性ぐらいの幅はある

驚きと視界を埋め尽くす男神の幅に声を出せずにいると

トラロック神が口を開いてこういった

「センテオトル今日から君は私の庇護下に入る」

「へ」

「じゃあ私は帰るよ。シヨチケツアルが神殿に帰っているからね」

何が何だかわからぬままトラロック神の庇護下に入ったようだ

折角独り立ち？したというのにまた誰かに守られるなんて!!

と考えていたのが見抜かれたのか

マクイルシヨチトルからは軽く小突かれた

両頬を膨らませ不満をあらわにする

両手で両頬を押され溜まった空気はゆっくりと出て行った

トラロックご夫妻電撃訪問から次の日

私センテオトルはリュウゼツランが咲く花畑にて

酒の香りを漂わせたある女神と会話していた

その女神の名はマヤウエル

リュウゼツランの女神にして醗酲の権能を有する女神

彼女はマクイルシヨチトルとシヨチピリとの酒に関する商売で

たびたび神殿を訪れている、今はあの二人が酒の勘定及び

酒の鑑定をされていて暇になったので私の元に訪れたという訳だ

話し相手も立派な仕事のうち！張り切って話し相手をしよう!!

「テスカトリポカ神が毎日の様にプルケを飲んでるって」

「テスカトリポカ神が酒を毎日飲んでる!?!」

テスカトリポカ神が毎日の酒を飲んでるという

言葉の羅列事態に昨日以上の衝撃と混乱が走る

あの真面目なテスカトリポカ神が儀式でも祭日でもない

ごく一般的な日常において毎日酒を飲み続けている!?!

一体何の冗談だと思えない

「といっても私の配偶神であるパテカトルから聞いた話だからね  
どこまで信憑性があるか分かったものではないから」

パテカトルという神の名前が出たとたん一気に不安は消えた  
何故ならその神は常に酔っぱらっており常に前後不覚で  
意識朦朧としている酒の神だからだ

彼の前ではテスカトリポカもケツアルコアトルになってしまおうぐ  
らいだ

一度それを口にして両者に殺されかけたというのは最早伝説に  
なっている

そして両者に殺されかけて何故死んでいないのかは永遠の謎であ  
る

パテカトル 酒の神 プルケの神

そしてマヤウエルの旦那さん

夫婦そろって酒関連の神なのだ

パテカトルは常に酒が入っているが

意思疎通が出来ないという訳ではなく

会話するときに呂律が回っていないので

「でも流石はテスカトリポカ神と言った所ね。

浴びるほど飲めど決して悪酔いはしないもの」

「浴びるほど飲んでるんですか？」

「酒の購入量が尋常じゃないのよ

その量を一気に仕入れて、また仕入れるから」

「もう浴びるほど飲んでるとしか考えられないってことですね」

「そういうこと」

テスカトリポカ神が大量の酒を購入している

テスカトリポカの神殿にいたところに仕入れていた

酒の購入量よりも格段に増えているということか

「まあ私やパテカトルは懐が増えていいんだけどね」

「成程」



「資材を蓄えるのはいいことデース!!」

堅実的で抜け目のない夫婦神である

末恐ろしい神だこのような手腕を私も身に着けたいものだ

底抜けた明るい声を出せるぐらい胆力を身に着けたいものだ

・・・語尾にデース？

この独特な話し方は

「ケツアルコアトル神!!?」

「はぁーい！私デース！お二人とも元気でしたか？」

お兄さんは寂したつかデースと私を抱きしめ

頬ずりし始めた、マヤウエルはそれを生暖かい目でみて

頬ずりすることを満足し終えたケツアルコアトルは

先ほどの優し気な表情から一転して真剣な表情に戻る

「マヤウエル申し訳ないのですが

これからセンチテオトルと重要なお話がありますので」

これから話すことを聞かせるわけにはいかないのだ

今日の所は帰ってほしいという頼みだろう

マヤウエルは最高神の突然の申し出にも動じず

そのまま部屋から退出した、出る間際私に向かって軽く掌をふって

いた

マヤウエルが部屋から出て数秒、神殿から出ていつて数分たったと

ころで

ケツアルコアトルは私を床に優しく下ろしてくれた

目は警戒の色を露わにしている

「マヤウエルが完全に神殿から出たので話すとしましょうか」

「他の神が聞いてはいけない事なのですか」

「ええっ・・・事態が深刻なので」

「それを私が聞いてもよろしいのですか」

「むしろ貴方が聞いておかなければいけない事なのです」

私が聞いておかなければいけない深刻な事態

ケツアルコアトル神に警戒の色を抱かせる程の

私が関わっている深刻な事態って一体何なんだ

「先日貴方は酷い高熱を出して気絶したことを覚えていますか？」  
「はい耐えきろうと思ったのですが機構の冷却機能がうまくいかず」  
「貴方の機構が高熱に耐えられず、強制的に活動を停止したんですよ」  
ね

「熱は上がるばかりで一向に下がらなかつたんです」  
「でしようね」

ケツアルコアトル神は心底理解不能という  
表情のまま苛立ちを隠さず話をつづけた

「センチオトル貴方には呪いがかけられています」  
「まじない!!」

「貴方に呪いをかけたのは…いえかけ続けているのは」  
「……まさかつ」

「そうですあの陰湿蜘蛛野郎です!!!」

陰湿蜘蛛野郎

テスカトリポカ・・・だよな

昨日あなたの身に起こった不自然な高熱は!!

あの陰湿粘質蜘蛛野郎の呪いだつたんです!!!

ケツアルコアトル神は不愉快さを隠さずに声を張り上げた

でも今の私にはそんな大きな声も聞こえてこない

テスカトリポカに対する不平不満も何も聞こえない

私の思考の中はテスカトリポカで一杯だつた

「……………」

あんまりな事態に思考が追い付かなくなる

テスカトリポカが 私を呪つた？

テスカトリポカが 私を傷つけようとした？

テスカトリポカが 私を攻撃しようとした

テスカトリポカが 私を攻撃対象として見た？

テスカトリポカが 私だけを見て害そうした？

ケツアルコアトルでもなく白いテスカトリポカでもなく

ただのシロネン、ただのセンチオトル

逃亡者のシロネン、裏切りのセンチオトル

私だけを見てテスカトリポカはまじないをかけた??

なんてなんて恐ろしい

なんて恐ろしいんだ

これがテスカトリポカの敵になるということ

テスカトリポカの前に立つということ

いや足元にも立てていないかも知れないが

なんとということだなんとということだ!!

でも今はそれ以上にも

顔の薄暗い笑みが止まらなくて仕方がない

やっと! やっと!! ここまで来た!!

やっと! 攻撃されるまでに来た!

やっと! 私だけを見てくれた!!

なんて嬉しい!! なんて嬉しい

両手を顔に当て歓喜する

ケツアルコアトル神は何故喜ぶのか理解不能という

表情と混乱を隠せずにいたが

ええつきつと誰にも理解できないんです

他の誰にも理解させる気はないんです

他の誰にもテスカトリポカが私を見てくれたのが

嬉しくて顔が熱くなったなんて誰にもわかりませんよ

まじないのせいで機構が熱くなったと

ケツアルコアトルには勘違いされてしまったのは

タイミングが悪かったという他ないだろう

ああ・・・今テスカトリポカは一体何をしているんだろう

今ここにはいない憧れの神物を

思い浮かべるべく視界をゆつくりと閉じた

浴びる 浴びる 飲む 飲む 飲み干す 飲み干す

飲み干して酒を一滴残らず飲み干し器を干からびさせる

手をかけた呪いの為大量に仕入れた酒を飲み干す  
何も嫁に逃げられたから八つ当たりの如く悪酔いしているわけ  
はない

後宮から忽然と姿をけした俺の妻 幼い女神シロネン  
もう一人の妻である大地と海の女神アトラトナン  
アトラトナンは昨日俺の祭儀を咎めようとしたので

そういうえばシロネンを見逃した仕置きをしていないことを思い出  
し

戦士ではない細い足首を逆に握り足首が一回転させた  
機構の激しい損失に対する痛みを訴えながら泣き寝入りしたん  
だった

怪我をしたところは誰にも見せてはいない

今飲んでいるものを飲み干せば今日の分は終わりにつく

これを飲み干せばアトラトナンの足を癒しに後宮に赴こう

そもそも俺の行いを咎めたことが不適切な行動だったのだ

そもそもシロネンが俺から離れようとしたのがいけなかったのだ

シロネン シロネン シロネン

そうだ シロネンがいない シロネンがなくなった

自らの意志で自らの欲望の為に神としての範囲を逸脱しようとし  
ている

好奇心も知識欲も意欲も向上心も俺は認めよう大歓迎だ

だが駄目だ テスカトリポカの配偶神とあろう女神が

よりもよってケツアルコアトルの匂いを権能をまとうとは

許さない 許さない 許されない

最高神として テスカトリポカとして 俺として

その行いを断じて認めない、この蛮行を許しはしない

こんな怒りはいつ以来だ、そうだあの女神だ

美しい花と工芸の女神 ショチケツアルを見た時以来だ

この中南米世界で一番美しい女神がいると聞き

ショチケツアルがいた神殿に訪れて以来だ

一目でショチケツアルだと理解した

一目でこの世で一番美しいと理解した

そして初めて生まれた不平等差に怒り狂った

何度殺してやろうかと迷った

何度柔らかな四肢を引き裂いてやろうかと迷った

だが弟分であるトラロツクの妻になつたと聞いたとき

不思議と頭が冷えたと同時に苛立ちに苛まれた

トラロツクの妻になつたならば害することは出来ない

トラロツクの妻にならなければいかようにも出来たのに

全ての酒を飲み終えた後部屋から出て

一匹の蛇が慌てた様子で俺の手に絡みついてきた

どうした俺の分身よ

何か報告せざる負えない話でも入ったか？

はっ??シロネンの転生機構であるセンテオトルが

シヨチケツアルの夫であるトラロツクの庇護下に入った？

シロネンがトラロツクの庇護下に入ったと聞いた瞬間

絡みついていた蛇は力が入った所為か息絶えていた

王に命懸けで報告した果報者を床にたたきつける

いやに冷静だった、やけに落ち着いて一つの結果を考えた

ケツアルコアトルを第二の太陽から引きずり降ろそう

あいつの犠牲なき世界は見ていて痛々しく腹立たしいかった

これは当然の結果だ、生贄亡き世界への当然の帰結

だから当然の結末の帰化の為に準備をしなくては

テスカトリポカは後宮へと進めていた足を引き返し

己が神殿を出て走り出した、走り出す方向には雨が降っている

雨が降り続ける神域　トラロツクの神殿へと足を進めた

シロネンへの手向けと戯れところからの試練に

己が神殿の花籠に

花を一輪添える為に――――。

## 第九曆 アトル

色とりどりの花籠を持ってケツアルコアトルの神殿を歩いていま  
す

どうも！顔から笑みが飽きずに浮かぶセンチオトルです！！  
今私は仕事を行っていないと屋敷を徘徊していまう程

高揚と衝動が抑えられません

先ほども花籠を走って運ぶあまり花籠を落としそうになりました

まあ 男神の機構からだである私の腕は長いので落としません

持つ力も強いので花籠を一気に六個も運べるんです

私！センチオトルは！！

今まで感じたことのない興奮を得ているんですっ！！！！

発熱していると言っても過言ではありません

いつもの胸の熱さとは決して違う

じりじりと焼け焦げるような熱さとは違う

じわじわとつま先からも感じ取れるほどの熱さ

万能ではなく全能のような陶酔感

作物を育てれば、想像通りに育てられ

花もたくさんの種類を咲かせて、今では新種の花を開発中です！！

何もかもが楽しく嬉しく喜びが溢れ出て仕方がないのです！！

朝目が覚めるだけでも、ただ歩いているだけでも

手を動かし、足を動かし、息をし、瞼を開き、閉じる

顔を空に向けるだけでも、地面に五体投地するだけでも

指を折り曲げるなどの些細な行動にも喜びを感じるのです

こんなにも私が今喜びに満ち溢れている理由は単純です

テスカトリポカが私に呪術をかけてきた

私に攻撃をしてきたのだ

私を見て私に害を為すために行動をした

あの厳格なテスカトリポカが祝い事でも無いのに酒を飲んだ

あの規律を守るテスカトリポカが自分の意思で

神としての規律を破つてでも

私を殺そうと呪術を施してきた!!

直接ではないがテスカトリポカの手にかげられた  
何度も何度も繰り返しこの事実と狂喜を反芻する

私が憧れているテスカトリポカの前に

やっつと! やっつと!! 立つことが出来た!

偶然でも偶々でも間違いでもなく!

テスカトリポカ神に手段を取らせることが出来た!!!

私はやっつと! 手段を取らせることが出来たのだ!

だが納得が出来ないことがある

どうしても納得の出来ない思考が止まらない

なぜ どうしてと 疑問は尽きない

テスカトリポカが規律を破つてまで

シロネンに攻撃を仕掛けたのか

それはとても不思議で納得できない違和感

短い期間で全てを理解できるはずなどないけれど

テスカトリポカと暮らしていたからこそその違和感

平等と名高いテスカトリポカ

敵であれ味方であれ両者に

平等であること 己の権能 神としての機構に誇りをもつ

高貴で誇り高く冷徹で他の神よりも神らしさを堪能する

あるものだけはなく、ないものも戦士の休憩所に取り入れる勤勉さ

己が神としてある限り神として役目を果たす真面目さ

そのテスカトリポカが一個体の神に対して攻撃をした

本来であればセンチオトルの行いも彼の戦いの管轄に入るなら

彼は苛烈な試練を与え、その後些細な幸運がある筈だが

センチオトルは――

シロネンはテスカトリポカから逃げ出した

戦いの神の元から逃げ出したのだ

彼の妻であることが試練であったなら

シロネンは戦いを放棄したということになる

もしや呪いは逃げ出したシロネンに対するテスカトリポカの怒り

？

テスカトリポカ神と話し合うこともせず一目散に姿を消した妻に対する憤りからきた八つ当たり？

そうなら・・・もしそうなら

やはり私はテスカトリポカの敵として

向き合い立ち向かうことは許されていないことになる

まだ彼の後ろにいることになる

テスカトリポカの大きい背中だけを見つめていることになる絶対に辿り着くことはできないと追いつめられる気分になるああでも待つて テスカトリポカの妻であること？

彼の方の妻って今私 テスカトリポカの妻として考えたの？ どうして結婚の儀式もしていないのに

ただ今日から俺の妻だと言われただけなのに

どうして私はテスカトリポカの妻であると

当然のように考えているの？

あの場所で妻として扱われて接してくれた

けれど私は？私はテスカトリポカを・

テスカトリポカに何を思っつて一緒にいたの？

逃げるのも、去ることも、拒絶も出来た筈なのに

本当にただテスカトリポカに妻になれといわれたから

庇護下にいるものの責務として果たそうとしたの？

それはテスカトリポカに対する憧れからくるものなの？

私はテスカトリポカに憧れているのに

テスカトリポカになることが心を焦がしているのに

まさかそんな・・・そんな馬鹿なことがある筈がない

第一身分も神としての経歴も何もかもが違う

生れながらにしての最高神 テスカトリポカ

生まれも権能も歪な零細の女神 シロネン

ただ同じ神という粹にただで

何もかもが違う



神としての質も  
神としての雅さも  
違う 質<sup>ちが</sup>雅<sup>が</sup>うのだ

私はテスカトリポカになりたい!!

だから真剣に彼だけを見つめてきた

ああそんな嫌だ!!そんな筈はない

考えてこなかった考えようともしなかった

許されるはずのない異常が

懂れてるから

手に入らないから

遠いお方だから

手にしたくないから

その力がないことなど分かりきっている

■はない 他意はない

■などない ■など焦がれるはずがない

私はテスカトリポカになりたいたんだ!!!

テスカトリポカに■してほしい訳じゃない!!!

許さない許さない許さない許されない!!

ふざけるな!!ふざけるな!!!

探した答えなど何の意味がある!!!

何たる不純何たる簡潔的な

誰にでも理解しやすい

落としてどころがある答え

あるわけがない正解があるわけがない

私自身も答えも結論も出ていないのに

このような狂った思慕なので理解できる筈がない

歯牙にも思慕にもかけないだろうが

彼に対し■があること自体が

彼の方に対する不敬に感じる

そうだ

私は許せない

憧れ以上の思いを抱かせたテスカトリポカを

私は許せない 許せない認めない

私を害する為に たかが私を攻撃した

テスカトリポカを許さない

テスカトリポカを■さない

テスカトリポカを■さない

憧れたいのか

憎みたいのか

ほめたたえたいのか

いかりをぶつきたいのか

テスカトリポカになることが目的なのか

今この状況がテスカトリポカになる為の手段なのか

テスカトリポカから離れたいが為の逃避だったのか

止まらぬ思考に頭も腕も重くなってきた

特に腕が徐々に重くなっている

花籠を下ろしたいのか

何をしたいのか目的が定まらなくなってきた

私は結局何をしたいのだろう

にしても本当に重くなってきたな・・・

ん？

んん？

んんん!!?

花籠を持ってしている腕が重い？

待て待て待て待て!!?

重い!!今重いつて!!?

今の私の身体はセンチメートルで

凄い!!凄い腕力とか色々あるんだけど!

凄く!!色々となんかあるんですけど!!?

こうなんかすごい強くなつたと喜ぶぐらい!

余計に何もなかったと気分落ち込んだりしましたけどね!?

自覚した違和感

自覚した腕にかかっている重力

間違いないと自覚する

「センチテオトルが持つていられない重さになった?」

周りを見渡せば思考を始めてから一步も足を進められていない!!

考えすぎて進んでいないかと思えるが違う!!

何故か花籠が持ちきれないほどに重くなっている

思考を始める前は確実に軽かった!!

やっぱり六個の花籠を同時に運ぶのは欲張り過ぎたか?

確実に重くなっている、確実に持つていられない

いやそれよりも 花籠が大きくなっている?

大きい持ち始めるころよりも確実に大きくなっている

六個の花籠が持ちきれなくなってる!!

私の身体が縮んでいいないかこれはっ!?

花籠を落とさないように機構全体で踏ん張りながら

自身の腕に目を向ける

六個の花籠を抱きかかえていない腕があつた

腕の長さも足の長さも体長も変わっている!?

というよりもこの腕はまるでシロネンのー重いつ!!!

あつためだと感じた同時に立てなくなった

重さを感じる聞きのあまり花籠を離す腕

複数の花籠から飛び出す色とりどりの花達

花の上に倒れ伏す身体 両手を前にして受け身をとる

幸い散乱した花達が積み重なって

倒れた衝撃を抑えたのか

神体事態からだに問題はない

いや身体の大きさには問題がある

それは花籠を抱きかかえていた時

そして両手を前に出した時に確信したことだった

先ほどまでセンチテオトルだった身体が

豊穰の女神 シロネンの姿に戻っている

の  
センテオトルの身体はケツアルコアトル神の御力を得てなったも

それにトラロツク神の庇護下に入ったことにより

センテオトルという男神の存在は些細なことでは揺らがないはず

最高神の二柱から加えられた守護の力 お二人からの加護があつ

た

つまりセンテオトルがシロネンに戻っているということとは

お二人の身に何かがあつたという異常事態を想定する

加護を保てなくなるほどの何かがお二人にあつた

だが今までにない異常事態に思考だけに行動を割く訳にもいかな

い

マクイルシヨチトルとシヨチピリを探しに立ち上がろうと

一度を顔を窓から見える景色をみた

それは目に焼き付くような光景だった

あれほど高麗な太陽はもう二度と見ることは出来ない

そう思うほどの風景だった

時代とその時代を担う神の象徴である太陽が

ケツアルコアトル神の太陽が

恩恵を受けるもの区別なく太陽が黒く染まっている

まるで黒曜石の様に此方が映し出されるような

ああ 彼の色だ

黒曜石テスカトリポカの太陽

どこまでも引き込まれる

どこまでも見ていられる

何気なく何の気もなく

腕を天に伸ばす

あれだけ大きいなら少しくらい

手に入りそうだと邪心して

手が太陽に重なりそうに――

「センテオトルウウウウウっ!!!」

なっ!? マイクルシヨチトルツ!!

探そうとしていた人物その1が見つかった

というよりも自分から来てくれた

探す手間が省けてありがたい

だけどシヨチピリはどうしたんだろう

「この空見てわかるよな!? 緊急事態だ!!」

「わかる! けど一体何が起こってるんだ? 原因は」

「テスカトリポカ神が! ケツアルコアトル神が! トラロック神が!!」

「何なんです!? 一体何が起きています!!」

普段は走ったりしないからか機構がそもそも戦向きではないのか

マクイルシヨチトルの呼吸音は激しくなる一方だ

取りあえず落ち着いて話せるまで待った方が良いよな

落ち着くまで様子を見よう

「ぜーっ……が」

「うん」

「はーっ……して」

「うんうん」

「ぜーはーっ……した」

「うんうんうん」

「……わかった?」

「何にもわかりません!!!」

ぜーっ……はーっ……という

息切れしか理解できませんでした!!

呼吸が落ち着いてきたのか大きなため息をはいて

マクイルシヨチトルは目を見開いて叫んだ

いまわかつているこ全てを伝えるように

「テスカトリポカ神がケツアルコアトル神を強襲し! 神の座から落と  
した!!」

はあーっ……!!!?

「なんですかそれ!? 何が起きてるんですか一体!」

「わからん!!! 今言ったことしかわかってない!!!」

つまり原因も何が起こったかも

何一つわかっていないってことですよね!?

ん?花の香り・・・これはっ!!!

「センテオトル!!マクイルシヨチトル!!」

「シヨチピリっ!!!」

後から来たなら事態の解明も先に進んでいるかもしれない

一縷の望みをかけてマクイルシヨチトルと顔を見合わせる!!

やはり機構が向いているだけあつてか

息切れもなくこつちに走ってきた

「二人ともあの異常事態についてはわかっているか!？」

「さっきセンテオトルに話した」

「先ほどマイクルシヨチトルから聞きました」

テスカトリポカ神がケツアルコアトルを強襲し神の座から突き落とす

前例がない訳ではないむしろ前時代においてそれを行ったのは

ケツアルコアトル神 その神ひと

なので今回のことは前回の復讐と仮想しておくか

とはいえ事を起こした張本人に聞かないと

何もわからない 現状は手詰まり一手だ

「なら話は早いマクイルシヨチトル薬草を用意してくれ」

「薬草?ケツアルコアトル神に必要なのか?」

「トラロケの神殿にテスカトリポカが表れてトラロック神も重傷だつて事も」

「ほはああああああっ!!!」

予想もしていなかった事態に二人して絶叫する

するとシヨチピリは説明を続けてくれた

「トラロック神の奥方シヨチケツアル様がテスカトリポカに攫われた!!!」

「その所為で今はどこも大混乱だ!!!」

「上から下まで大混乱が続いている恐らく時代を担うのはトラロック

神になると思うが」

「だが今重傷？・・・一体全体何が起きてるんだ!!」

「襲われたお二方は重傷で今は神核を維持するのに精一杯だから・・・」  
「回復するまで事を把握するのは難しいか」

落ち着いたマクイルシヨチトルとシヨチピリは

冷静に話し合っている、その冷静さは私にはなかった

なぜならテスカトリポカが人妻を攫ったという衝撃

未婚なら話が変わってくるだろうが（それでも神格に関わる罰はある）

根は大真面目なテスカトリポカが自ら規律を破って

トラロツク神の妻シヨチケツアル様を攫った

離婚してもいない妻を攫う

離婚して正式な手段を踏んでいれば

王権の象徴であるテスカトリポカなら

迎え入れることが出来ただろう

だが今回はどの手順も踏んでいない

最大の不義にして最悪の略奪

「・・・一体何が起きようとしているんだ」

「ここで討論しても仕方がない取りあえず薬草だ」

「そうだなセンテオトル・・・今はシロネンか？」

「センテオトルでいいよ薬草だね手伝うよ」

「よし薬草を集めたら本館に行こう」

私達は薬草を集めに花畑に向かった

黒い太陽に背を向けてーーーーー。

「ちっ!!邪魔されたか・・・」

まあいい一時的に時代の太陽を乗っ取り  
シロネンがどこにいるかは確認できた  
ついでにトラロツクのいる場所も把握出来た  
あの脚じゃ神殿につくまでにくらかかることやら  
トリ公もあの様子じゃ全身回復まで一時間弱つてところか  
だが十分だ今回の目的を果たすには  
十分すぎるほどの時間、俺であれば五分もあれば充分な時間  
まあ折角だ 折角の機会だ 二度とない乾季だ

「悠々自適に向かいますかね」

トラロツクの神殿に来るのは初めてだからな  
観光ついでに参考にしよう

俺の受け持つ領域の雨季の参考になるかもしれないからな  
雨の恵み多きトラロツクの神殿

その神殿の奥深く

いつもは色鮮やかに花々が咲き誇る

シヨチケツアルの華やかな庭園

だが今日は華やかな花達の見る影もなく

庭園の花々は枯れていた

これから起きる蹂躪から逃げるように

これから起こる理不尽に踏みにじられないように

恐怖を見てしまわないように

花達は自ら散った

その異様な光景をみて

怯えたのは庭園の主人 シヨチケツアル

昨日までは瑞々しく生き生きと色づいていた

輝かしい花達が次の日花びらだけを残し

その姿は見る影も無かったのだから

トラロツクの神殿に不法者あり

不審者でありいるはずのない神

シヨチケツアルから最も縁遠き神

争いの神 テスカトリポカの来訪である



勿論戦いと縁遠いシヨチケツアルに対応できる筈はない

戦神と花の女神では親と赤子程の差がある

つまり何もできない 力の差は歴然

赤子が親の指を握りしめる力しか出せない

花深き慈悲深き女神シヨチケツアル

彼女には戦う力が何もなかった

抵抗することも考えたことはなかった

何故なら――――。

女神である自分を傷つける神は

いるはずがないと想定したからだ

トラロツクの妻であるからと

胡坐をかいていたわけではない

それが普通で日常だったからだ

何処にでもある平穩

何気ない日常

その終わりは

突然の暴風によって荒らされる

石畳の上に敷き詰められた花びらたち

色とりどりの花達に照らされるように

その上を歩くシヨチケツアル

彼女は枯れていない花がないか

庭園を歩いている最中だった

すると大きな布を身に纏う長身の者がいた

トラロツクの客人かと普段なら近づいたであろう

だが今は神殿の庭園の花すべてが枯れるという

異常事態につき流石に近づこうとはしなかった

だが尋ねることはした、見るからに怪しい人物だったので

「貴方は誰ですか？この神殿に一体・・・」

「シヨチケツアル」

「!!」

この声は！聞き覚えがある

かつて夫トラロツクとの婚姻の時

訪れた神の中にいたトラロツクの神の兄

「・・・テスカトリポカ神？」

シヨチケツアルは安心した 安堵した

トラロツクの兄であり、一部でもある

テスカトリポカが訪れたとなると

この異常事態について何か尋ねることが出来ると

安心して視線を足元に向けた

その一瞬が命取りだった

その一時がシヨチケツアルの今後を決めた

テスカトリポカの覚悟を決めてしまう一時だった

何も起こらないと思いいテスカトリポカに近づくシヨチケツアル

テスカトリポカの目の前に近づくシヨチケツアル

安堵の一瞬

安堵の一蹴

全てが一瞬 全てが一風

石畳の上に散っていた花びらが巻き上がる

テスカトリポカがシヨチケツアルを

抱え走り出した衝撃で花びらが紙吹雪の様に

舞い上がり、散り落ちる

一方変わってケツアルコアトルが神の座を落とされた

その事態の対応に追われたトラロツクは

自身の神殿の異常事態に気づいたときは遅かった

辿り着いた時には遅すぎた

すぐに すでに

テスカトリポカがシヨチケツアルを抱えて走っていたからだ

舞い上がる無数の花びらに紛れるように

疾走する暴風 テスカトリポカ

その一瞬を見逃さなかった 愛しい人を見逃さなかった

トラロツクは走り出した というよりは領域に雨を降らし

その雨粒雨粒に瞬間移動した

追跡するは暴風の化身にして自身の現身 テスカトリポカ

「久しぶりだなトラロック！」

「シヨチケツアルを離せ！テスカトリポカ!!」

「おーおー最初から本気かトラロック」

「当たり前だ！ここは俺の領域!!お前！自分が何したかわかってんのか!？」

「わかってるに決まってるんだらう?」

「貴様あつ!!既に婚姻した神を攫う事が最大の不義理と知っての事か!!」

トラロックは雨粒で瞬間移動しながら

俺を追い続ける、素晴らしい素晴らしい移動方法だトラロック

これが戦争であればどれだけ良かったかどれだけ神核震えたか

だがこれは此方の言葉だぞトラロック

「それは此方の台詞だトラロック」

「はあっ!!?何を言っている!!」

「お前が庇護下に置いた神にセンチオトルがいるだろう」

「それがどうかしたか！彼は男神だろう!!」

「ケツアルコアトルにそう言われたのか?」

「ああ！彼に庇護下に入れてほしいと言われたからな！」

「あれな俺の嫁だ」

「はっ???」

二人揃って間拔けな顔をするな

勘違いしてるんだらうなく面白ろい

だが戦争とは言わないがこれは略奪者と守護者の戦いだ

「余所見とは余裕だなトラロック」

「がっ・・・!!」

トラロックに油断をした罰として蹴り飛ばす

蹴る直前に足を折りやがった良い戦い方だが

それは俺には通じない、神核を蹴り砕く勢いで蹴ったので

暫くは動けないだらう仕方がないお前に経験が足りないせいだ

シヨチケツアルは元々の機構が戦向きではないから

魔力と暴風雨に耐え切れず気絶している

元々そうなのだから 戦の要素を求めるわけにはいかない  
さてそろそろ雨が止む

トラロツクの領域を抜ける

今の俺を止めれる神はいない

ケツアルコアトルもトラロツクも邪魔は出来ない

唯一怪我をしていないがウイツロポチトリは

騒動の対応に追われて追いかけてこれない

だから今のうちにシヨチケツアルを後宮にいれる

トラロツクの妻であろうが関係ない

俺が妻にしたいから妻にする 欲しいから手に入れる

このような大騒動を知ればシロネンは何と反応するか

今から楽しみで仕方がない

逸る気持ちと共に走る走る

シロネン さあシロネン

次はお前だ

俺を見るときだ

テスカトリポカに会う時だ

俺をみるシロネン

俺を見る